

噺中  
役人中

但隅州新城右御廻状ニ相洩候処、新城も右同前可差越由、追而被仰渡候故、新城ニ差越候事。

右者元録<sup>(禄)</sup>四年春、肥後仁右衛門盛香・私兩人江御記録所見習被仰付相勤候処、元録九年子四月廿三日夜、御城御類焼ニ付、御記録所ニ被納置候薩隅日三州之諸

家系図・文書・旧記等寫致燒失候、依之元録十年未春、御用人伊地知八右衛門殿御取次ニ而、兩人御領國中系

圖・文書・旧記等為見分可被差越之旨被仰付候故、右見分之趣御廻文を以諸所ニ被仰渡候写右之通ニ候、右

ニ付兩人申合、御領國中二三相分、仁右衛門事西目筋五拾五箇所、筆者三宅奎兵衛被召付、私儀者東目筋外

城五拾式箇所、筆者貴嶋仲兵衛被差添、兩人為見分四月廿五日鹿兒嶋罷立、私儀者最初加治木ニ差越、從其

順路次第ニ致巡見、隅州桜島迄ニ見分相終、同年九月廿五日鹿兒嶋ニ罷歸、右之首尾申上候、元録十四年之

冬、御記録奉行被仰付相勤候、為後年書付置候、以上、

元禄十六年癸未十月廿二日

市来源右衛門

家年判

右通相見得、御回禄以前被為集候物ニ者旧遠之古書等被為札候ハ、最安可被札得事茂可有御座

(ハリ紙)

「右之前後寺社奉行より茂被相札、穆佐より書出候留と相見得、段々及殘缺候諸帳之内ニ左之通御坐候」

天保十二丑

穆佐地頭飯屋諸牒書拔

穆佐菩提所洗心山悟性寺

〔宗退轉之〕

右者、昔時天台宗之由、此是より、後西家之寺ニ罷成了、

〔我久開山〕

是より、笠巖と塔ニ相見得申候、年月相知不申候、右西切捨り、笠巖と塔ニ相見得申候、年月相知不申候、右西

家之時分寺煙上仕、由緒・縁起之書致燒失候由、其後及毀破曹洞宗住持仕来事、五代開山福昌寺十六代喜冠

〔和尚勸〕

是より、請開山ニ而御座候、忌日八是より、四日、切捨り、

一 古代之開基・施主相知不申、

一 大檀越修理太夫久豊公穆佐江被是より、御住城候、依之

號御寺高是より、被仰付、義天存忠様御牌召是より、被

召置候、于今奉崇敬候御是より、應永卅二年乙巳正月廿切捨り、

一日、當分高三石被仰付置候、

一本尊藥師座像高サ式尺、是より切捨り安阿弥之由申傳候、

此間ニケ寺略ス、

右者、此節寺社御奉行所此間切捨り之儀書付差上可申旨被

仰渡、傳之趣如此ニ御坐候、以上、

元祿四年未十二月五日

悟性寺 董良印

穆佐 御喫衆中

右申傳之儀、別儀無御座旨承届申候ニ付、奥書如此ニ

而御坐候、以上、

(元祿四年)

未十二月七日

無外 是より切捨不相分、

寺社 御奉行所

元祿拾年丑閏二月十四日

穆佐天正寺 悟性寺由緒書留之内、朱書にて寫濟と有之、

日州諸縣郡穆佐御菩提所

洗心山悟性寺

本尊藥師如来長式尺九寸 横式尺座像安阿弥作之由申傳候、

脇立十二神

一昔時天台宗之一山伽藍ニ而為有之由候処ニ退轉、

一其後西家宗、此時開山竺巖長僊大和尚行常相知不申候、

一曹洞宗勸請、開山福昌寺十六世喜冠大和尚、右同、

一大檀那前三州之太守義天存忠大禪伯御尊牌、

一悟性寺御菩提所由来者、御先祖久豊公應永之比、日

州為御守護從鹿兒府穆佐江御移被遊、御在城候節、為

御菩提當寺御中興ニ而御座候、御寺領五町被召付之、

久豊公 忠國公 御兩殿様御崇敬ニ而、就中當寺藥師

如来別而被遊 御信仰、藥師堂由々敷御建立之由候、

右御時代御目錄棟等數多御坐候処ニ火災差起、棟記録

寸切与燒失仕候与申傳候事、

一久豊公應永三十二乙巳年正月廿一日被遊 御逝去候節、

御尊牌當寺江被遊 御安置、拜勤仕来候事、

一其以後及乱世時代相易、天正之初伊東義祐被遊御退治、

日州再 御安堵之節、從 義久公悟性寺之儀者前 久

豊公 忠國公如御舊例之御菩提所ニ被召成之旨被遊

御意、本領被召付候処、天正之末毀破勘落ニ付而、右

御領惣様被召上候事、

一慶長之初御知行式拾石被仰付候得共、其後被召上、當

〔分カ〕高三石被仰付置候事、

一當寺客殿時、御修甫被仰付候事、

右悟性寺由緒之次第、古来より申傳書記申候、

外ニ末寺等七ヶ寺略ス、

右者、寺方由緒之次第委細可申上之旨、寺社御奉行所

より被仰渡候付、申傳候段之書記差上申候、以上、

悟性寺

無外

元禄十年丑閏二月十四日

穆佐

御嚶所

45の4

右之表由緒書、元禄四年未十二月可差上旨被仰渡候付、

右之通相認差上候処、去年四月、右由緒書焼失仕候条、

右之留帳を以可書出旨被仰渡候ニ付、如此御坐候、以

上、

〔元禄十年〕 土橋平馬印

丑閏二月十四日

吉野堅介印

寺社

御奉行所

阿万十左衛門印

〔本文書ハ「穆佐悟性寺義天様御石塔一件勘考書上下」一〇二の2号文書ト同文ナリ〕

右通相見得、御回禄以前ニ茂段之書出置、明暦元年九

月、穆佐正祝子より為書出社帳之留ハ第三條之末件ニ

申上置、其節寺之帳留ハ相傳不申、右丑閏二月十四日、

天正寺等之由緒者右之社帳次ニ申上置、何分ニ茂其時

分迄者、長禄四年 忠國公御再興為被遊古棟札之現物

其外古寫等茂相残居、御用被仰渡差上為申筋相見得、

被為糺候ハ、決而證據相成物可有之者案中ニ御坐候処

寛文之願又安永之度等ニ未被為盡手事御坐候者、實以

御遺憾之至御座候、夫を寛文之頃迄者可被為糺舊記之

便無之様申上候義ハ、如何ニシテ茂難得其意、久遠之

事八年増湮滅仕習ニ而、一年ニ而茂早日ニ被為糺候社

第一と存候、前文之通段之被為集置候諸旧記等餘多御

回禄ニ焼失仕候故、元禄年間者再ひ被為集候処、其節

より相始候様ニ申上事者、其御役座より申立義ニ者御

坐候へ共、前文之形行明白成證據御坐候上者、何分ニ

茂難受説ニ御座候、左様御坐候而、寛文十年悟性寺之

願書寺社方ニ而御糺無事者、何ぞ旧記之有無ニ抱而之

事ニ者有御坐間敷、其訳者別ニ子細御座候、左ニ委敷

申上候、

※(別紙)  
〔朱〕  
〔寺社方古日記〕

一 寛文六年丙午八月廿日、御老中より喜入五郎兵衛殿  
私宅ニ来遇、

47 御口達書之写

御分國中寺社方之支配被仰付候間可被致差引候、尤  
一人之分別ニ而難計儀者家老中へ致相談可被相濟候、

以上、  
〔寛文六年〕  
午八月十九日

48 〔上文略〕  
右之通ニ被仰付儀ニ御坐候ハ、細々御條目被下度  
候、又筆者兩人ほと被召付可被下候由ニ而、右之御返  
事御條目之儀尤ニ被思召候、御相談被成御條目を以可  
被仰上候、存寄之儀も御坐候ハ、書付を以可申上候、

一度ニ條書ニ御載可被成候  
〔合カ〕  
見■候而

此方より

49 〔寺社方古日記〕  
〔全〕

〔 〕 社方ニ付得御差圖之覺

一 神社佛閣之内、公儀修理忝分方之修理之分被仰聞度  
候事、

一 外城ニ忝分方修理之寺社家何ヶ寺与相究候儀承置度候  
事、

一 此内修理被成来候寺社家も僉議仕、被相止候而も可然  
所者時々可申上哉之事、

此間四ヶ条略ス、  
右、存寄候分如此御座候、此外被仰出可然儀共御條書

ニ被為載候様ニ御申可被下候、以上、  
〔寛文六年〕  
九月十日  
入来院石見

喜入五郎兵衛殿

50 〔全〕

一 寺社方支配之儀、此中ハ御談合衆差引ニ而、御分國中

ニ掛ル忝分出銀ハ御物座御下知之故、御談合衆より  
御物奉行ニ相談ニ而修理為被仰付事なれとも、此節より

引分別各ニ寺社方支配之儀被仰付事之由ニて、忝分  
出銀も當座より差引候様ニと被仰付候、

一寛文七年未二月十一日云々、

一同月十九日、公義修理老分銀方之修理之八かち、前  
以難被究候間時々申出候ハ、御相談被成可被仰付候  
由、喜入五郎兵衛殿ニテ石見直ニ承候、但今月初比ニ  
右之段被仰渡候へとも、のせ落しニテ此所ニしるすも  
の也、

一同廿一日、國分之内國府寺より觀音堂修理之儀被申出  
候得共、寺社帳ニ無之候、其上由緒之證文等無之ニ付、  
不罷成候通申渡候、此中川内國分寺よりも天神修理之  
儀被申出候得共、寺社帳ニ無之候、其上由緒之證文等  
無之ニ付、修理不罷成候由申渡候、同前之儀候間不罷  
成候由申渡候事、

一同年七月十日申ノ刻、石見殿卒去、日比病煩之上癩痢  
相發、火急ニ被為相果候、是より以後源太夫・六兵衛  
書付置なり、

一寛文七年未九月三日、鳴津新八郎寺社奉行へ被仰付之

御使鎌田太郎右衛門殿、同五日、御受申上ルニ付、座

者何方ニ可被仰付哉之由御尋申、御返事とシテ被仰聞  
候ハ御見合被成、追而可被仰渡候間、其内ハ於私宅用  
事可相達由也、御使本田六左衛門殿傳達之、

一同年十二月七日、新八郎致登城、本田六左衛門殿ニ而

申上候ハ、私儀来春仰〔久胤〕候ニ付、寺社之儀者鳴津

出雲方へ被仰付候間、次渡可申由其上〔見開キ不能、ヨメズ〕候、然者

前々より修理被仰付〔見開キ不能、ヨメズ〕可相止

之由、最前御条書ニ被仰渡置候、依之此中勘出シ書付  
置申候儀共在之、差出候間御覽被成、ケ様ニ被仰付候  
儀も於有之者、出雲方へ可被仰聞候由申候口上書相渡  
候、口上書之留別紙有之、

一同九日、御用之儀候間、新八郎致登城旨承候付罷出候、  
本田六左衛門殿ニ而被仰聞候ハ、此中差出候口上書御  
覽被届、御老中いづれも御同意ニ被思召候、此外ニも  
ケ様之事多ニ可有之候間、出雲殿致相談規模帳相調差  
出候ハ、御老中判形被成可被下置之由候、御返事ニ  
申候ハ、右ニ申出候儀共ハ方々より修理之儀被申出候  
付而、行當勘出申事候得ハ以之外手廣事にて候間、俄

ニ詮議仕候而も規模ニ可罷成儀勘出シ候儀難成と存候、  
併被仰付事候間詮議仕、重而可申上之由申候事、

八瑞應院決定かと存候云々、

座印

諏訪左右衛門殿

一寛文八年申正月十一日、先寺社奉行鳴津新八郎御上洛  
御供被仰付之、為其代出雲江被仰付之、徒江戸被仰下  
候由ニ而旧冬被仰渡候、御城内へ座被相立可被下由申  
上候へ共、私宅ニ而可承之由也、

右通、先年寺社帳出来候刻と御坐候ハ、明暦元年七月

一帳箱等旧冬より此方へ相直候事、

ニ而被仰渡候事ニ可有御坐、左候而、所喫連名ニ而被  
書出候と御坐候者御案文之通、同年九月上旬、為申出  
帳之事ニ相違有御坐間敷、即根占より為書出帳等茂于

一野村助左衛門江中取被仰付候事、筆者川野六兵衛・弟

今寺社方へ有之由、然者其後寺社方被召立刻□□寺

子丸八郎左衛門、

社帳御引渡為相成ニ者別条無之与存候、

54  
〔同年二月〕

一同月九日、去年四月廿四日、入来院石見殿江被遣候御  
手紙細々見届申候、御地頭所・祈願所之事瑞應院ニ相  
究、観音寺之儀ハ脇并ニ致決定候ハ、其段御返事次  
第所ニも可被仰渡之由ニ而候間、別而僉議仕候、先年  
寺社帳出来候刻、所喫連名ニ而瑞應院祈願所と被書出  
候事候間、今更難相改儀御座候、殊ニ観音寺被書出候  
も、願娃驚之祈願所与有之候、然時ハ一所之惣祈願所

55  
一同年四月三日、西壽院如来堂阿弥陀之事、寛庭芳宥大(忠良筆)

姉御影之由被申出候へ共、日新記ニも御影とハ不相見  
得候、殊更先例無之候間修造申付間敷候、先年圖書被  
承之、御合力為有之由ニ候へ共、夫ハ別銀方ニ而各別  
之儀ニ候間、其旨相心得候様可被申渡候、乍然此節寺  
社修造之規模相究相究候間、若無據儀考出候ハ、其  
通ニ可申付候間、是又為心得候、以上、

大乘院

座印

一同年五月三日、加世田常福寺阿弥陀寬貞(庭力)様御形代之由被申出候へ共、御書留も無之故、御形代ニ相極、修造申付儀ニ無之通申渡候事、

56

一七月十八日、西壽院阿弥陀之事、寬庭様御影之由申傳、其證據者 御位牌有之候通又々被申出候へ共、御書物無之候、余寺ニも右躰之儀候へ共不用之候、雖然日新様御建立之儀者 日新記ニも相見得候間、堂計之修造可申付候、其段可被申渡候、以上、

座印

大乘院

一同年八月十七日、寺社方規模帳式札(鳥津久元)帶刀殿へ為内談致持参候、被為見届右規模帳之通、可然被為思召之由承候事、

一寛文八年申九月朔日、先奉行ニ致相談、寺社方規模帳

57

差出候ハ、家老衆判形可被成由、旧冬本田六左衛門殿ニ而被仰渡候付、御菩提所有由緒寺社修補規模帳壹札、諸外城宗廟・祈願所・菩提所修補規模帳壹札差出候事、

本行九月廿五日、右規模帳新納又左衛門殿寺社方之儀細々御存ニ而候間、写江戸へ我等方より遣候者引合相濟、何も判形可被成候、規模ハ此帳面之様ニ市正殿(鳥津忠広)・帶刀殿・岩右衛門殿御相談ニ而、右口上ハ帶刀殿より直ニ承候、依之帳ニ札相返候、

一筆令啓上候、然者私儀寺社方支配被仰付候砌、嶋津新八郎致相談規模帳相調候而差出候ハ、御家老衆可被成御判之由候ニ付、此中調させ、何れもへ懸御目候処、寺社方之儀、貴様能御存知之儀ニ而候間、中取を御方御覽候而帳面於御同意ハ、御判可被成との事ニ候、今度伊東弥右衛門便ニ差越候条御覽可被成候、勿論被思召寄儀共ハ可被仰聞候、随而外城之宗廟・祈願所・菩提所修補之儀ハ申付規模ニ被仰聞候故、其帳ハ不差越、奥書はかりハさせ進覽仕候、猶期後音之時候、恐

惶、

十月十七日

(島津)  
久胤

新納又左衛門様

人々

一御菩提所有由緒寺社修補規模帳壹札并諸外城宗廟・祈願所・菩提所修補いかた帳奥書写、伊藤弥右衛門便ニ江戸新納又左衛門殿へ遣之候事、

本文申十二月十二日、又左衛門殿より返書ニ承候、寺社修補之規模并外城祈願菩提之奥書、いかにも尤之儀ニ候、此上存寄少も無御座候、此筋ニ相談可仕由ニ而、帳河野六兵衛持下り候、彼人口上ニも此段細々被申候なり、

58  
〔全〕

一寛文九年酉正月十四日云々、一同十五日、有由緒寺社修補規模帳一札、新納又左衛門殿付状尚通相添、御老中判形被成候様ニ可被致披露由申候、本田六左衛門殿へ相渡候、諸外城惣廟・祈願菩提之両寺者應其分際可致修補旨、當座へ被遣置候、御條書有之上者、右規模

帳ハ我等判形ニ而可召置候間、御覽可<sup>(被力)</sup>置候由、奥書計差出候事、

一七月三日云々、一本田六左衛門殿より筆者満尾五右衛門御城江被召寄承候者、此中差出候寺社修補規模帳奥書相濟、御老中御判被成候、乍然又左衛門殿印形無之候様子者、奥書六月十日ニ相濟候處ニ、今月朔日ニ下着被成候ニ付、日限相違之故印形不申請候、有之候者而不叶儀ニ候ハ、可申請之由候而、右規模帳一札又左衛門殿江戸より被遣候状式通被相渡候、右返事、寺社修補規模帳奥書御判相濟被遣、儘ニ受取候、又左衛門殿印形之儀者江戸より之状有之上ハ不苦之由、五右衛門ニ而申入候事、

59  
〔全〕

一寛文十一年亥二月四日云々、一同月十八日、加世田杉本寺地頭嶋津東市正殿江相付、大岳様御廟所六角堂并本堂修補之儀雖申出候御規模帳ニ無之、加之近年修補為被仰付例依無之、先如此中從住持相當之繕被仕置、可然通申渡也、



右通相見得、御領内神社佛閣修理・祭禮等之事ハ寛永十六年秋卯十一月、御職分ケ被為在候御、平田狩野介・猿渡新介江被仰付置候処、江戸表御失墜、無御據ニ付、修補茂難調鉢之神社佛閣有之儀不可然与之御吟味ニ而、承應二已九月より國家之御祈禱ニ候間、御領内皆同人別老分出銀被仰渡、御物座<sup>今之御</sup>勝手方、御下知之上、御談合衆差引ニ而修補等有之、左候得共、其頃迄ハ寺社帳込茂無之ニ付、明暦元未七月、御記録方惣宰鎌田筑後殿より御領國中神社・寺院・堂宮等之由緒細々ケ条を以被為札、案文三冊ニシテ諸郷へ御廻文被為廻、同年九月、其所之喫役人共より三冊之御問条ニ應候而某々書出、其後萬治御竿之節、諸所祈願菩提両寺之外知行等無之無證文之寺社家者、惣而斛地ニ被召成時分迄茂追々由緒等申出、御位牌様等被為立候寺共ニ者、筑後殿證文為被渡置茂有之、一統御改正之上、寺社帳被為仕立、寛文六年午八月、御領國中寺社之支配入来院石見へ被仰付、右之寺社帳等被相渡於宅勤之、即寺社奉行開祖ニ御座候、翌七年未七月石見死去ニ付、暫之間ハ筆者河野六兵衛・渋江源太夫承之、同年九月、嶋

津新八郎へ寺社奉行被仰付、是亦於宅相勤候処、明年春江戸御供ニ付、同十二月、跡役嶋津出雲江被仰付、最前為被渡置御條書之内ニ、前々より修理被仰付候所ニ而茂於無由緒候<sup>者</sup>ハ、不被仰付向ニ被仰渡置、新八郎段々考付候事共申出候処、出雲申談規模帳相調差出候様被仰付、同八申九月、御菩提所有由緒寺社修補規模帳壹冊、諸外城宗廟・祈願所・菩提所修補規模帳壹冊相調、出雲より差出候処、御家老嶋津市正殿・嶋津帶刀殿御見届、帶刀殿より、寺社方之儀ハ新納又左衛門殿能御存知候間、江戸へ可遣旨被仰渡、同十月、右式冊之内諸外城宗廟等之帳ハ奥書計写添候而差登せ、同十二月、又左衛門殿より、少茂御存寄無之候間、弥此向ニ可申談旨被仰下、同九年酉六月十日、右之有由緒寺社修補規模帳ニ御家老衆御奥書ニ而御加判相濟、同七月、寺社方へ被相渡、左候而、諸外城惣廟・祈願菩提之両寺ハ、最初より之御條書ニも有之事情間、右之規模帳者出雲判形ニ而召置候趣、前件通寺社方古日帳へ有之段承届申候、然者寺社帳并證文等之事ハ專筑後殿被仕立置、其修理方ニ付規模帳者新八郎・出雲為

被始置筋ニ別儀有御坐間敷、左候処、同十年戌四月、悟性寺傳悦より、義天様御寺ニ而于今、御石塔御座候間、御修補被仰付度願出候節、同十九日、寺社奉行より為被申渡書付ニ、客殿修補江者為御合力銀五枚遣候と御坐候者、菩提所相當之御規模ニ可有御座、此外茶堂・庫裡・藥師堂者所より之差出ニ者有之と御坐候者、明曆元年未九月、穆佐佐共より書出為申出家之帳ニ有之と申事ニ可有御坐、左候得共、前年七月、為被相渡御規模帳之外ゆへ規模迦と有之候半、天満宮者寺社帳ニ茂無之与御坐候者、明曆元年之所喫共書出ニ為申出洩事ニ可有御坐、又儀（義）天様御寺と被書出候得共、左様成證文無之ニ付、規模帳被相除与御座候者、明曆元年御札之節、小高之悟性寺文盲之鑑司共、現在被為立候、御石塔之事、又ハ大檀那前三州太守義天存忠大禪伯と書付、十文字御紋迄彫刻為仕古鉢之御位牌等被為立居候由緒共茂、決而為申出洩ニ可有御坐、其砌委敷申出候ハ、申良弘誓寺抔同様、氏久公御位牌ニ開山大檀那と有之計ニ而、筑後殿より證文為被渡置例茂御坐候間、悟性寺ニ茂證文可被渡置之処、何分ニ茂申

出様鹿略ニ為有之者別儀無御坐、夫故筑後殿證文茂不被渡置ニ付、新八郎・出雲へ被仰付規模帳取しらへ候節、全ク心付不申、頭より悟性寺ハ相除候而、有由緒寺社修補規模帳相調差出候故、其時之御家老衆も其通ニ御治定被為在、御輿書相濟、御判形迄茂被相加候而、訖与寺社方へ被相渡候上ニ御座候間、證文無之ニ付規模帳被相除候と為被申渡ニ可有御座、責而者寛文八年四月、西壽院如来堂等為願出頃ニ茂御座候ハ、此節寺社修造之規模相究候間、若無據儀考出候ハ、其通可申付与有之時分ニ而、随分依申分而者御取拳茂可有御坐、勿論其前寛文七年十二月、新八郎・出雲申談規模帳相調候様、本田六左衛門取次ニ而為被仰付砌、新八郎より以之外手廣事ニ而、諸方より修理申出候節、併行當相考事候へハ、規模ニ可罷成儀俄ニ難考候付、併被仰付事候間、詮議可仕与為申上置旨茂御座候得共、右通前年之西六月、最早御規模茂御治定ニ相成候、翌年戌四月ニ、悟性寺者願出為申事故、出雲より其節ハ何之札茂不仕、差付右様為被申渡ニ弥相違有御坐間敷、適其以前、筑後殿より明曆元年委敷被為札候刻ハ左程

不申出、御規模御治定之上願出候故、御取奉無之時宜合差知れ、何共不都合之至、其節迄新八郎奉行仕候ハ、俄ニ考候事ハ、規模ニ不罷成道理茂被辨居、今少ハ糺

方茂可有御坐候処、出雲一人ニ而右次第被申渡、旁殘多事御座候、何ぞ其頃可被糺程之旧記等ニ便り無之与申ニ者決而無御坐、子細者前件ニ申上通之成行御坐候、  
一第六七條云々

右條中、別段辨解仕程之事無御坐、尤末件申上候内ニ相込居候間、此場者略仕候、

一第八條云々

右條中、百七拾年餘全備、伊東家領地之様申上件、曾而其通ニ無御座訳者、第三條之辨ニ細々申上置通御坐候故、此場江者略仕候、左候而、悟性寺大檀那駿河守祐満を始、長倉上總介鉢之歴々、於高城幾人歿死去、悟性寺へ致埋葬候半も難相知ニ付、場所柄宜敷、土中取仕立念入、平人之取置与者不相見得趣之一筋を以者、彼是治定難成趣者誠ニ其通ニ而、尤之事御座候、然共畢竟者安永三年、大六・次太夫糺方仕候節之調書等精蜜ニ吟味不仕故之感歎と存候、成程伊東代之古墳茂不

少候得共、一片石茂舊記等ニ引合、口碑等相殘候石塔者、義天様外ニ一切所見無御坐、子細者末件ニ委敷申上候、

一明和九年辰秋、日州御仕登せ、御代官所書役帖佐孫右衛門江内ニ御記録奉行之内より傳達仕候義有之、子細者、久豊公御廟所不相知、段々御記録所ニ而被相糺候処、穆佐江被為在共ニ者無之哉、被考訳度候間、所中之寺山者勿論、藪山等古墓有之場所、兼而氣を付相糺萬一御法名等有之石塔茂出候ハ、御記録所へ申出候様所役々江右之孫右衛門便より内ニ傳達之趣有之候由ニ而、悟性寺堺内兼而古石塔有之所ニ候故、直ニ其秋より役々立會堀方為致由候得共、何ぞ不見當夫形取止置為申由候処、翌安永二巳十一月ニ相成、高岡郷土祇答院七左衛門与申老人悟性寺へ參候間、住持黠玄より右之成行申聞、何ぞ被承傳候儀共者無之哉相尋候得者、七左衛門拾四五歳之頃ニ茂候哉、亡父勸解由左衛門召列、當寺へ致參詣候節、藥師堂之上ニ有之竹山江列行、此所江者昔之殿様御墓為有之場所ニ候間、大切ニ仕候得与為申聞置事有之段、七左衛門より住持へ咄聞せ

候為申由、夫故住持茂其邊篤与考合せ見候処、薬師堂之上竹山ニ而、其内ニ九尺方計其時分迄矢張り土少シ堆キ處有之、必此所之事ニ茂可有御座与別而不審を起シ被居候由、折柄小林町田口茂兵衛与申者、右之場所より六間計下之方へ有之大楠老本代銀上納、自船造立用ニ申請、同三年午正月中旬比より致本直筈之段承候合、住持江問合有之候故、同十五日、當番嚶阿万孫八郎方へ差越、右塚之様相見得候少シ土高処為堀候而、被相糺度申出趣有之、嚶役中申談、同十九日、穆佐押落合段兵衛江茂成行申出、翌廿日、立會人数等相定、又立手當申渡置、同廿一日、段兵衛を初嚶中村主右衛門・組頭野村市左衛門・横目吉松仲左衛門・郡見舞宮之原周右衛門立會、夫拾式人召寄せ、右之場所尺程茂為堀候処、直ニ石塔之地盤共相見得候石有之、猶々相疑、其下大概四尺程茂為堀候得者、真石埋居突起候処、其下ニ切石有之、突起候勢ニ少々突穿候処、丸切石差渡三尺五六寸、厚六寸程之冠<sup>蓋</sup>せ石有之、其下角石を以数多致助石、其間々ニ小砂相詰、其下ニ大甕有之、右之穿目より甕之内鬮骨相見得、外ニ五輪又ハ竿石躰

之文字ニ而茂可有之石者不相見得候得共、右通前以内達之趣茂有之候処より心掛、右次第ニ御座候間、若哉御廟所欵茂難計、則圍垣相調郷士番付置、同廿二日、嚶主右衛門并田中清兵衛・野村李左衛門・阿万孫八郎より成行申出、大六・次太夫被差越、同二月廿二日穆佐到着、段々相糺候趣其節之一卷ニ有之、只今よりハ六拾九年以前ニ御坐候得者、其内ニ者口碑旁随分連續仕来候事共茂御坐候間、猶又相考、左ニ申上候、

60 <sup>〔本〕</sup>安永三年二月廿六日大六・次太夫穆佐より初發届書之内 <sup>〔川上〕</sup> <sup>〔東郷〕</sup>

一高岡衆中祁答院七左衛門与申者、當午八拾四歳罷成、承傳候趣有之由所役より申出候付、右七左衛門召寄相尋候処、親祁答院勘解由左衛門存命候節、七左衛門拾五六歳之時分父子列立、悟性寺江先祖之墓參など致候節、此邊者 殿様御墓有之候場所ニ而大切成所之故、鹿末之躰ニ而徘徊等仕間敷旨、呉々咄申聞かせ置候段、右之七左衛門より直ニ承届申候、

右之七左衛門事、安永三年八拾四才罷成候得者、寛

文十年 御石塔為立居年より式拾貳年目元祿四未年之生ニ而、其拾五六才者寶永二三年ニ相當候間、親勘解由左衛門年輩ハ穆佐地頭伊集院宮内・悟性寺傳悅・野村半五左衛門な□、同時代之者ニハ疑無御座、左候得者、勘解由左衛門若年より幕參等仕候節々、右御石塔之現在立居候場所等慥ニ見覺罷在、右通咄聞せ置為申ニ相違有御座間敷、然者住持傳悅より、于今 義天様御石塔壹斤御座候計と為申出、寛文十年より右之寶永二三年迄三拾六七年之間、勘解由左衛門見覺居候御石塔何方ニ欵轉ひ埋れ、見失ひ為申ニ者別儀有御座間敷、左候而、此邊と其為在跡者能々覺居、右之七左衛門江前件之通具々申聞置、七左衛門八拾三歳罷成候已霜月、住持江咄聞せ候故、翌午正月、楠木本直ニ付聞捨ニ難仕、嚶方江茂申出及堀方、僅壹尺計茂為堀候得者、差付御納之真天窓ニ而、右次第ニ付而者勘解由左衛門兼々見覺罷在、其子七左衛門江此邊 殿様御墓為有之場所と大切ニ申聞置候一筋より堀出、大六・次太夫差越、其場へ七左衛門召寄せ、直ニ相糺候節茂此所と為申出事共乍口碑茂元祿四年生レ程有之、頓与無

疑茂實說ニ可有御座、夫故勘解由左衛門同時之住持傳其左右之悦事者第五條ニ茂申、候于今（見開キ不能、ヨメズ）其隠居者 貫明様御譜（義久）茂有之、天正四年、落合勘解由主人義祐を為諫比より、僅十九年相後れ候文祿三年ニ為生老僧ニ而、大概右之落合為存知程之事者承傳罷在、語聞せ置候事茂哉有之、傳悅茂差付 義天様御寺ニ而、于今 義天様御石塔壹斤御座候耳と訴出、地頭宮内者申出旨承届、無別儀与致繼書、半五左衛門者每茂之通悟性寺御墓參被遊賦与申渡候、彼是之古書付等ニ茂能致符合居、誠ニ 御元祖様御已来、連々御由緒之御威光被為貽置候一筋之末世ニ相託候者、此 御石塔共第一ニ御座候処、中古前文通之御不都合ニ而御取拵無之、只右之勘解由左衛門父子大切成場所と堅固ニ申繼仕置候事計ニ而、右通堀出上為申始末誠ニ明白成事ニ御座候間、此上何之疑可有御座哉、外ニ是程古来御由緒之連續仕来候 御石塔又可有御坐哉、御記録者勿論、先史口授等ニ茂一切不承及、夫故決而御逆修ニ而者有之間敷と去秋も粗為申上置事ニ御座候通ニ而、猶又篤与相考候成行、右次第ニ御座候、

61 〔同年午五月八日大六・次太夫罷掃申上候調書之内〕

一高岡花見村之内徳田門之名頭善兵衛親九左衛門當午八拾壹歳罷成、悟性寺由緒之儀付、若年之時分承傳候趣有之由候付、花見村庄屋田原圓右衛門役所江召呼口柄承候処、國分龍昌寺十一世之住持元黄大牛和尚隱居後、花見村之淨岩寺江被居候時分、悟性寺六世之住持別山藝傳和尚代悟性寺江致供養越候御、藥師堂之邊 殿様御石塔有之由候間、猥ニ踏入、筭なかき申間敷与幾度咄被申間候段、九左衛門より直ニ承届申候、

右之九左衛門 茂安永三年八月拾壹歳御座候得者、寛文十年、御石塔為立居頃より式拾五年目元禄七戌年生ニ而、若年之時分与申出候者拾式三才ニ茂候半哉、左候得者、是亦七左衛門同様寶永二三年ニ相當候間、其時分迄者右之勘解由左衛門計ニ無御坐、住持も藥師堂之邊竹山之内ニ者 殿様御石塔為有之事□慥承傳居、右之九左衛門 杯へ、猥ニ踏入、筭共かき不申様制止為仕と相見得、猶以勘解由左衛門より其子七左衛門江為申聞置趣ニ茂符合仕、旁無疑證據ニ御座候、

△「△コ、ヨリ」  
△此以下 義天様御逝去御埋葬御石塔之場所等、私共吟

味仕候趣、委細左ニ申進候と有之内ニ茂、逐一其通共難取受儀御坐候間、御役場一統之吟味ニ些々斟酌差扣候茂不本意奉存、一々致勘考左ニ申上候、

一第一第二、御系図・御家譜ニ被載置候趣ハ相違可有之事ニ無御坐、然共御逝去之地名、御埋葬并御石塔之場所等毛頭書載せ無御坐候、

一第三、福昌寺年代記、應永卅二正月廿一日、嶋津久豊卒于本宅云々、第四、飯野一之宮社司家歳年代記、應永卅二、義天本宅ニテ卒云々、第五、右同、永正五、

忠昌本宅ニ而自殺云々等之引證ニ而、御系図・御家譜惠燈院殿与被載置、第三・第四両書共 義天様於本宅御逝去、奉号惠燈院殿候旨記置、右本宅与申儀、第五條 圓室様御生害之件ニ茂相見得、鹿兒嶋清水御屋形

之事ニ紛れ無御座与聖榮・應永之両記ニ而差究候而、義天様御事、弥以於鹿兒嶋清水御屋形被遊 御逝去候ニ別儀無御坐与申上趣意、専本宅与申儀、清水御屋形

ニ差究為申一筋之吟味哉ニ被為推察、本宅与申事清水御屋形に限不申例茂外ニ明白御座候間、其通ニ茂御治

定難被成事ニ奉存候、子細者左ニ申上候、

62 [朱] 島陰雜著]

一 市来官城新宅祈太守并尊母平安原夫云々、自今月第十

五日至二十又三日、嚴設梵儀於新宅、拜請淨侶云云、

專祈 三州太守藤氏武久身宮康健云云、更冀某之信力

堅固新宅益沐法湧云々、文明十二年庚子九月廿三日、

63 [シユ] 御家譜]

一 祭大中等公文

維元龜二年歲次辛未六月朔壬辰二十有三日甲寅、前奥

州太守大中良等庵主、於本宅俄爾而登仙矣、越二十有

九日庚申、就于日新精舍隨梵儀以闡維、其三男藤原年

久謹慎湯茗蔬菓之奠、昭告奠靈、以文其詞曰云云、

(本文書ハ「旧記雜錄後編」一五八九号文書ト同一文書ナルベシ)

64 [企] 上]

一 維元龜貳年歲舍重光協合林鐘廿有三甲寅、先君三州太

守前陸奥守大中良等菴主、俄然唱無聲三昧於加世田城

寢室、越末系藤氏征久不耐哀慟、今月朔五日乙丑、就于日新精舍、謹慎清酌匱羞之奠、昭告 尊靈、厥詞曰

云云、

(本文書ハ「旧記雜錄後編」一五九〇号文書ト同一文書ナルベシ)

65 [朱] 吉田清純筆抄]

右両通之祭文、此本在清水岡寺云々、 日新寺常潤

院之内ニ 大中公闡維場石与書記石有之候、右を以

於加世田御城ニ 大中公御逝去被遊、御葬場者常潤

院之内闡維場石有之所ニ而御葬送有之、 御廟所ハ

當分福昌寺ニ被遊御座候与相見得、是以別条有御座

間敷与奉存候、川上氏・町田氏より口傳ニ致承知置

候ハ、大龍寺本御内當分中神氏屋鋪内ニ御持佛堂有

之、於彼所御逝去之由ニ候、御系図ニ者何方とも御

傳記無之候、御家譜之内ニ右通相見得居候、後年為

考書写之候事、

闡維場石シヤイハセキ常潤院ニ有之石銘之文字右通有之由候、闡字

右通相見得、加世田御城之事茂本宅と有之、市来御城

之事ハ新宅と有之、清水御屋形ニ限而本宅と申筋ニ茂不相見得、何方ニ而茂、御座所ニ被召成候御城者、鹿兒嶋ニ而茂、加世田ニ而茂、市来ニ而茂皆本宅、又新敷内ハ新宅など、某ニ被成御座候時代ノ、ニより為相替證據前文通有之、義天様御事ハ、應永卅一年正月、加江田城被為攻陷、(直力)□ニ御座所ニ可被遊逆御修築有之、諸士昼夜相働御成就之上、諸軍者被差返、暫(為力)□被成御坐事相見得候間、其頃ハ加江田御城をこそ新宅と欵本宅と欵申候事、當然ニ被相考申候、子細ハ右御城御成就無間茂、菊池家より使者有之、(元久)怒翁様御代、右躰之上使御馳走等者於志布志御馳走為被遊御例茂候故欵、其以前より新納忠臣之御娘を、大岳様被為娶、彼地之中城ニ被成御坐候と、得者加江田城とに御交代候而、義天様志布(本力)□□御越、段々御饗應為被遊事共者、聖榮茂被書置候得共、其後別ニ御座所被為構候事、又ハ何方ニ茂御移且御帰城之事茂全不被書置、左候得共、其春こそ被為築候御新宅之加江田、其上志布志之義ハ、大岳様御夫婦様被成御坐、大奥同前之中城ニ候間、珍客被為濟次第二者如本御互御移替為被遊筈、夫故應永記者

山東御取向と申件之書續きニ、從冬比(久慈)匠作御風氣次第ニ被為重、直ニ御逝去之事迄書連御坐候文勢ニ而者、加江田城之事を本宅と申候茂却而近き様被相考御坐候、御系凶・御家譜者勿論、聖榮自記・應永記其外御祭文・諸年代記等ニ至迄、御逝去之地名且御葬埋之場所書載せ為申旧記無御坐候間、本宅与申儀を清水御屋形と押當候、一筋之吟味ニ而者何共御治定難被成事ニ御座候、一初條天下ニ隱ナキ云々、第二條應永廿年云々、皆福昌寺之御創建より惠燈院之事共申上候件者、大形其通ニ可有御坐、就中惠燈院之儀ハ古來應永記ニも相見得候通、義天様御寺と相見得、從、大岳様毎日御靈供料とシテ、向嶋野尻村御寄進被為在、又、御夫人壽山様御菩提料とシテ鹿兒嶋坂本之内山水田三段、永享十一年二月、持久より被為寄附、右、御夫婦様之御位牌殿ニ而、御法事等此寺ニ而被為執行候事共ハ、皆其通可有御坐、然共、御廟所者又別沙汰ニ而、外ニ何そ古來連續為仕明證無之候而者御治定難被成事ニ御坐候、子細者、大岳様之深固院、大中様之南林寺、貫明様之妙谷寺、(義忠)松齡様之妙圓寺、(久保)一唯様之皇德寺、



(龜寿、義久女)  
持明様之興國寺杯皆 御銘之様御位牌殿ニ而、段々御

高等被為附寄、只今ニ至り御取持茂格別ニ而、勿論御

年回御法事等茂右之御寺ニ而社被為執行御事候得共、

直ニ御尊骸御埋葬ニ而、御廟所等被為在候場所者御

位牌殿与者各別被為替(ハリ紙)候御例茂不坏事ニ而、大岳

様者加世田六角堂ニ被成御坐、大中様も於加世田御

城御逝去、於日新寺御葬禮被為在候明證、前件之御祭

文ニ歴然御座候、其後御改葬被為在候欤、今ハ福昌寺

ニ被成御坐候、此等ハ乱世ニ而、御領内さへ御菩提

所迄其砌之御帰葬難被為調御時宜、被奉想像事御座候、

貫明様御已来ハ世茂太平罷成候故、於國分御逝去候得

共福昌寺へ御帰葬被為在、松齡様者於加治木御逝去、

一唯様者於朝鮮、持明様者於國分御逝去被遊候得共、

皆御帰葬ニ而、福昌寺江御廟所被成御座、尤其砌 御

銘之様之御祭文、且世之旧記等ニ茂明白相見得、聊茂

可疑事ニ無御座候、夫故 義天様之惠燈院茂別段御由

緒連續仕来候事証無御座候得者、只御法事等被為執行

候御寺と申、一筋之吟味ニ而者、何分御廟所迄茂差究

候事ニ御治定難被成事ニ御坐候、

一第三條 仲翁和尚應永卅一年福昌寺御住職、其翌三拾

二年 義天様御逝去ニ付 御喪禮之式被相勤、第四條

者右御葬式起龕之唱文、第五條者七々日御法事於福昌

寺被為執行候付、 忠國公より之御祭文、其外御百ヶ

日奠湯・奠茶之唱文、御一周忌・御七回忌之御祭文、

御拾三回忌ニ者御二男好久祭文、御夫人壽山妙久大姉

下火之唱文等いつれ茂於同寺御執行有之、行業記之趣

と自筆書留ニ有之、起龕之唱文と混与符合仕、御法事

之儀迄茂相揃、旁以 義天様御葬式於福昌寺被為遂、

仲翁和尚御引導師被相勤候御事實歴然明白成證據、此

上者毛頭残り無御座候と申上趣意、私之考ニ者、右時

(分)□之御祭文、成程數百千言之長文御坐候得共、一言半

句茂何方御寺ニ而御葬埋被為在候趣之事實者全ク不書

載せ、皆共寂滅之空言ニ而事証ニ可取義相少ク、別而

殘多文牀ニ御坐候処、何を證據ニシテ毛頭殘無之与申

上候哉、 圓室様 (忠治) 蘭窓様 (忠隆) 興岳様 (忠盛) 梅岳様 (忠良) 大中様

貫明様其外御以來者勿論、御代々様御祭文ニ而、大

概御葬場之御寺茂前件拔書置候牀ニ、就其精舎隨梵儀

以闡維こと有之、祭文之格程ニ見得居候事□候処、  
覺罷在

義天様御夫婦様ニ限り御葬埋之寺名略候而、何共不書  
 置義不審之至、押而考を付候ハ、原本八年号月日寺  
 名等茂有之候を、出家共文辭稽古之助ケ迄ニ略写仕來、  
 頭より記録之為ニ傳寫不仕故ニ茂候欵、又者致傳写時  
 代者他領ニ相成居候所茂有之、略候欵、遺憾無此上ハリ茂  
 奉存候、乍然レ皆 惠燈院殿と申明文有之間、夫を證  
 據ニシテ相考候得者、御七々忌之營備梵筵云々、拜請  
 建忠堂頭和尚云々、御小祥忌之就于本寺集同門諸禪侶  
 云云、拜請建忠堂頭和尚云々、御七周忌之就于當寺云  
 云、拜請建忠堂頭和尚云々、御十三回忌之就于當寺謹  
 集同門諸禪侶云々、拜請龍山堂頭云云有之、其梵筵或  
 ハ本寺當寺など申義、皆惠燈院を為指詞ニ茂可有御座  
 哉、左候ハ、右之御祭文茂本院又ハ當院と社書可申  
 ニ本寺當寺と有之、併惠燈院者福昌寺之院号と古來寺  
 傳茂御座候得者、此節之吟味通福昌寺之事ニ茂見込相  
 考申候処、同門と可申禪侶者 御領國中ニ者無之、其  
 上龍山者即玉龍山之略ニ候処、福昌寺ニ而拜請龍山堂  
 頭と申詞者、事新敷句ニ而難申義候間、別寺より拜  
 請之詞ニ候半与、當福昌寺者被申事由候処、福昌寺ニ差

究候義如何可有御座哉、且行業記に混与符合仕候連段  
 々レ慥成向ニ被申立事候得共、全躰是者 仲翁和尚迂化  
 之文安二年より式百五拾餘年相過候跡ニ而、福昌寺三  
 十九世愚海和尚元祿十年ニ為綴置新著之書ニ而、其上  
 愚海者悟性寺傳悦より八年齡茂却而拾歳相劣り、寛永  
 十八年生之人ニ御座候得者、事實ニ付段々追考之誤有  
 之欵、彼此致相違候事茂有之共過分御座候、其子細ハ、  
 皆 仲翁和尚福昌寺御住職中之事之様申事別冊ニも申  
 立御座候得共、右之御祭文御七々忌より御七周忌迄之  
 文ニ者、皆拜請建忠堂頭和尚与社相見得、是ハ福昌寺  
 住持与者難見受誤者見得申候処、何之按據御坐候而、  
 福昌和尚之事之様申事候哉、逆茂私之考其通ニ者難見  
 受、其上建忠と申義を 仲翁和尚之諱欵道号ニ茂見込  
 矢張り福昌住山之時と誤候哉ニ相見得、是以其通ニ者  
 難取受、子細者其比谷山之内ニ寶泉山建忠寺与申寺有  
 之、應永卅二年巳六月廿日、大檀那源貴久公御袖判  
 ニ而、吉田若狹守兼清より父了圓禪門等菩提料とシテ  
 谷山中村之内森田五段、水田壹町、同年十月廿七日、  
 正智禪尼より同山田村大河内之内三段余、同卅三年正

月廿六日、好久より和泉清峯泉公大禪定門追善とシテ、給黎之内奴久見塩屋之寄附状等ニ者、皆建忠寺或建忠禪寺と有之、同卅四年八月三日、禰寢立清(玄カ)より明山禪門追薦とシテ郡本中村之内五段、同十日、本田重恒より西田村之内宮地箇、同安(元德)了より花棚内小田巷町之寄附状等ニ者賢忠寺と相見得、同卅五年二月十八日 貴久公御袖判ニ而四至境を被為定候ニ者、寶泉山賢忠禪寺と一字違候得共、建忠寺者 仲翁和尚被為開候寺と承候間、彼寺へ御移錫之時ニ茂相當可申、然者福昌寺住職と者難申、就而者行業記も全無誤与者被考不申、何分ニ茂御祭文中ニ一句茂御葬場之寺名無御坐ニ付而者、起龜之唱文共計を以有之、又文安二年十月八日藤原久景より給黎院奴久見之内塩屋之寄進状ニ者、義天御志深御座候間、彼在所奉寄進賢忠寺所也と相見得、賢と建と一字之異同御座候得共、皆建忠寺之事ニシテ、開山者仲翁様と申傳由候間、右御祭文等者彼寺へ御移錫之時ニ茂相當候欵、又者別僧住持之時ニも候哉、何分ニ茂福昌住職之時与者難申、畢竟式百五拾餘年相後れ、元禄中ニ書綴候行業記ニ御座候間、現之古文書等

ニ者右通齟齬仕居候、然処混与符合仕候様ニ申上候者旁難取受、何分ニ茂前件通、過分有之御祭文中ニ一句茂御葬場之寺名無之ニ付而者、只空寂成起龜之唱文共計を以、弥御廟所之筋ニ御一決定被為在、此事如何可有御座哉、殊更 御夫人壽山妙久大姉下火之唱文より御百ヶ日・御七年忌御祭文等之儀者皆 御院号茂無之、右様寺名者書載せ不申、就于當寺就于本寺与有之茂猶以何方之寺共難相知、左候而、文言之内ニ、日出東方山更新と申句茂有之、或ハ歸依三寶洗滌一心結好因縁跳出三界なと申詞者、山東之洗心山悟性寺之字を作込候哉ニ茂却而被疑様有之、旁卒爾之決着成兼候事ニ御座候、右建忠寺之廢寺跡、谷山中ニ可有御坐置と不存候之古文書ニ 義天御志深御座候間、喜人之奴久見ニ有之塩屋を賢忠寺江寄進為仕事共茂何欵謂れ茂有之様被考申事候間、谷山土橋邊者 嶋津様森と申傳候場所之最寄共へ建忠寺之廢跡有之、共ニ者無御座哉、是亦被糺置度成事と奉存候、

一前件初條より五條迄之引證ニ而、福昌寺西御靈屋 恕翁様御相廟ニ式拾回基被為立、其内ニ而勿論 恕翁様

御正面ニ被成御坐、其左御頂ニ 義天与彫刻御坐候

御石塔を、 義天様御遺骸御蔵之御印シニ可有御坐、

然共長祿・文明等之福昌寺火事ニ、右通一所ニ奉集候

形ニ而、元来之御場所与者難見受、且御石惣躰小ク、

正御石塔ニ者乍恐御軽き様御坐候得共、段々之證據茂

御座候付、此節之吟味より必定相違有御座間敷与此節

之初而吟味ニ差究為申上事候得共、其證據ニ申立候條

目茂大概前件ニ辨解仕置候通、何ぞ混与之的證逆者無

御坐、惣別引用有之諸旧記茂私之考ニ者格別詮立候筋

ニ茂難申上、如何御治定可被為在哉、抑右 御石塔之

義ニ付而者、古来之 御系圖・御家譜より以下山田聖

榮自記・應永記・福昌寺年代記、其外文書・旧記・御

祭文等之内ニ茂毛頭相知不申 御石塔ニ而、應永卅二

年 御逝去より當年迄四百拾八年、 御城下中無隠茂

御代々様者不及申上、大小身共一統參詣仕来候福昌寺

へ被為在ながら、何之口碑茂世ニ不申觸、是迄一切書

留候物茂一切無御座、殊更惠燈院之儀ハ 御位牌殿ニ

茂御坐候処、右之御石塔誠之御廟所ニ御坐候ハ、不斷之御花香ハ扱置、益彼岸之御回向等

茂相勤可仕候処  
相勤、代々住持就中近代者为存者茂無御座御石塔之

有之茂存知不申位ニ而、當住持共ハ、去丑春椀山四郎

左衛門より申聞初而存知候由、先年より其躰と相見得

誓詞一件之御通達ニ茂御廟所不相知と被仰渡置候処、此節俄ニ差究

候間、細事左ニ申上候、不審之至、細事左ニ申上候、

候事、

66 「御通達」  
上文略ス」

八代 一久豊公 義天様 正月廿一日

九代 右、惠燈院御廟所不相知候、

一忠國公 大岳様 正月廿日

十代 右、深固院御石塔有之候、

一立久公 節山様 四月朔日

右、市来龍雲寺御石塔有之候、

外ハ略ス、

一御先祖様御忌日、亦者御正忌日ニ誓詞被仰付間敷旨、

以前より段々被仰渡置候も有之候得共、向後毎月十七

日計誓詞不被仰付候、其外者都而御精進日誓詞被仰付

候儀不苦候、

右之通、此節被仰出候付、誓詞有之座々江可致通達候、

寛保二年戊十二月

〔島津〕〔入甫〕  
左衛門

67 「欽呈」上

(別紙)

嗣承、字天祐、諱宗津、洞山二十七葉、嗣前福昌  
龍室從、々嗣泰雲琮、々嗣心巖信、々嗣中翁邦、  
々嗣大寧竹居猷、々嗣福昌開山石屋梁、

薩州鹿兒島郡玉龍山福昌禪寺、廼藤氏嶋津恕翁忠公為檀度、而創建之精廬也、蘭慕石屋之法定、推之為之開山祖、而堂宇具體崇師之道化、猶一活佛、祖塙号智日、其院号慧燈、院之左邊有坐禪石、瀑布觸之、則四時吹雪、臣僧天祐見住于茲矣云々、

永正第六八月 日

(本文書ハ旧記雜録前編二二八一五号文書ト同一文書ナルベシ)

右之通、天祐和尚永正六年、其院号慧燈と被為書置候得者、古来福昌寺之院号ニ無別条證據明白ニ候間、

寺傳と申ニハ及間敷、為相究明證と奉存候、

68の1

(別紙、異筆)

「其元掛持之邊江存火庵と申寺古来為有之由致破壊、右寺地之儀者當分欠地ニ而候哉、又者寺地支配等いたし候哉、何そ右之地等へ石塔類ニ而も相立居候哉、右存火庵儀ニ付御用被仰渡候へとも、此方へも分明不相知候条、其御方へ由緒等も相知候ハ、委曲御書付ヲ以御返答被仰聞度御座候、此段為御問合如斯御座候、以上、

十一月廿九日

福昌寺

副司印

谷山御暖衆中

68の2

右之通被仰渡候間、其許へ前方存火庵と申候寺地有之、當分何様ニ記有之儀ニ而有之候哉、御用由にて被仰渡候間、其元御札被成、早々有無之訊被仰越度存候、以上、

卯十一月晦日

吉利次郎左衛門印

帝釈寺

皇德寺  
副司

68の3

一存火庵寺地之儀ニ付、段々被仰渡趣承知いたし、依之此方帳面等段々相糺申候へとも、右破懐之(マヤ)訳相見得申候、尤帝釈寺江茂右之段申渡候へとも、帝釈寺江も右之訳相知不申候段申出候付、此段御返答申上候、以上、

卯十二月朔日

皇德寺

副司印

谷山  
御喫衆中

〔宝曆九卯(十一)月〕

69

一久豊公御廟所御灰塚糺一卷帳巻冊

70

〔朱〕  
〔安永三年午五月八日大六・次太夫調書之内〕

一久豊公御廟所御灰塚等不相知候付、谷山土橋之邊へ森有之、右之森御廟所之由申傳候儀も有之由ニ而、去ル寶曆九年糺方被仰渡、右申傳之場所へ同役共差越見分仕、段々相糺申候得共、信用難仕儀有之候付、福昌寺

并患燈院江茂相糺申候処、 恕翁様御廟所江段々御石塔有之、右之内江 義天与書記候御石有之、 御靈骨

又者御遺髮被納置候儀者相知不申候得共、 久豊公御

石之儀者無別条義与奉存候段申上置候処、 御石塔先

キ様思召を以、 御遺髮・御靈骨等被納置候哉、御糺

方茂可有之事ニ候、然共先當分之通ニ而可被召置候間、

右ニ付諸書付等御記録所へ格護致置、御用之節可差出

旨、(義開入中)彈正殿より被仰渡置候、然者右 御相殿ニ被成御

座候 御石塔茂、 御靈骨等被納置候義ハ其節も相知

不申候ニ付、私共此表江被差越候、前以此度之御糺方

之心得ニ茂可相成哉と存候而、福昌寺 恕翁様御靈屋

江致參詣、 御相殿ニ被成御座候 義天様御石塔与申

傳候御石奉拜候処、 御正統様御石塔ニハ乍憚御不相

應と相見得申候云々、

71〔安永三年午八月十一日寺社奉行調之内〕

一福昌寺西卯塔 恕翁様御廟所之内江 義天之二字有之

候御石塔為致拜覽候処、五輪之御石塔ニ而 義天之二

字彫刻有之候、毘石之儀者別而古鉢ニ相見得、上下者

少シ新敷相見得候由、右を以致吟味候者、此節穆佐古老之申傳之趣并同所衆中小田四郎右衛門咄之趣ニ、

殿様御石塔穆佐中へ以前ニ為有之由候得共、當所暫伊

東領ニ相成候節潜ニ忍を遣、御石塔を取除跡不相知様

いたし、其下ニ御石塔之頭石を埋為申由、然者右福昌

寺 恕翁様御廟所江御建有之候 義天之二字の散石者

穆佐より持越、かりニ御安置為申上ニ而者有之間敷哉、

急事之節御石塔不取除候而不叶節者、御法名彫付有

之候散石致大切事之由候、御石塔之下空地ニ而、御

尊骸御内(く二而カ)も不相見得候由候、御正統様御相殿ニ

被遊御坐候儀も無心元存申候云々(ハリ越)「相見得申候、右之

小田か事ハ左ニ申上候」

72 「安永三年五月八日大六・次太夫調書之内」

一 穆佐衆中小田四郎右衛門當午六拾八歳ニ而、拾壹式之

比梅橋筑兵衛与申者五拾計之時分咄申候者、殿様御

石塔穆佐中へ以前為有之由候得共、當所暫伊東領相成

候節潜ニ忍を遣、御石塔を取除跡不相知様ニ致、其下

江御石塔之頭石を埋為申由云々、四郎右衛門江茂直承

届云々、

(別紙、ハリ紙)

「本文安永之度、小田四郎右衛門拾一式才之比、梅橋

筑兵衛より伊東領之者共潜ニ忍參、御石塔取除跡

不知様為致与之説ニ付、左様之基ニ茂可相成儀、寺

社方古帳ニ左之通有之由、

73の1

奉讀誦供養大乘妙典一千部

大願主藤原朝臣伊東修理亮祐青

第一町

息災延命子孫繁昌武運長久、故如件、

永祿十三年庚午南呂十八日 願主敬白

73の2

法花嶽寺八町坂ニ王門より坂之下迄八町、道乘一町ニ

付石壹本ツ、相立、右石ニ銘書有之由、先比檢者差遣

候節見届置せ候、依之右銘書相写法華嶽寺より差越候

間、御内意相伺申候、以上、

「貞享四年

卯十月三日

座印

73の4

73の3

右、黒葛原吉左衛門殿ニ而遂披露候処、為御返詞被仰渡候者為入念儀被相伺候、然者右銘書俄相消候而者可目立候、一字ツ、漸々消除可然、右之段御隱蜜之儀候間、脇々江露顯不仕様ニ可慎由、法花嶽寺御當地江參上之節、堅固ニ可申渡旨承之、

一高岡噺有屋田仲左衛門當所江參上ニ付、當座江召寄以覺書、隱蜜ニ段々之儀可申渡由、守右衛門殿被仰候覺書左ニ記之、

覺

高岡法花嶽寺八町坂ニ王門より坂之下迄八町、壹町ニ付石壹本宛相立、銘書有之由候、右銘書様子有之儀ニ候間、蜜々ニ一字ツ、不目立様ニ漸々ニ可消除由、法華嶽寺住持江可被申渡候、尤御隱蜜之儀候間相慎、此儀法華嶽寺住持之外他言有間敷候、以上、

〔朱〕  
貞享四年卯とし也

十月七日

座印

有屋田仲左衛門殿

覺

73の5

當寺ニ王門より壹町目ニ一基ツ、八町目迄ニ石佛八尊相立、其銘書様子御座候付、蜜々一字ツ、不目立様ニ漸々ニ可致消除之旨被仰付候而、卯十月七日ニ高岡噺衆有屋田仲左衛門殿より書付を以承候間、此頃迄ニ右之銘書消除仕候条、其段申上候、以上、

〔貞享五年也〕

辰七月廿三日

法華嶽寺

白岩印

寺社御奉行所

右、辰七月者元録<sup>(録)</sup>元年ニ而、寛文十年 義天様御石塔現在為有之年より拾九年以後之事ニ相當、貞享四卯十月七日より翌辰七月迄纔十ヶ月之間ニ、蜜々与者乍申、前件通八基ニ某々彫刻有之文字を消除為仕ニ付而者、右両三年之比、伊東領内より致參詣候者共、決而氣茂相付、互ニ語合不審を為越ニ御坐候半、永録以来元録初迄百貳拾年計明白ニ為彫付置、伊東修理亮祐青与申銘書等一ヶ年茂不過中ニ惣而消除為申ニ付而者、彼領内之者共遺恨ニ為存茂當然之情合被致躰察事御座候、就夫享保二三年梅橋筑兵衛杯五拾歳計罷成者共頃迄ハ見聞之事有之、此前者 殿様御石塔穆佐中ニ為有之事



候得共、伊東領之者共忍參、其御石塔を取除跡不相  
知様致し、頭石を埋為申与之咄共為仕事を、小田四郎  
右衛門拾壹式歳ニ而承覚罷在、安永三年六拾八歳ニ而  
申出候故、大意ハ致符合様御座候得共、何分ニ度右躰  
幼少之聞覚ニ而、當所暫伊東領相成候節、潜ニ忍を遣  
杯申儀決而聞違ニ御座候半、或ハ川之測ニ為沈哉ニ為  
申茂無訳推量ニ候半、夫故安永之度ハ専川面を探索  
為仕由候得共見出不申由、旁考合申候得者、伊東領之  
者共潜ニ頭石を為堀埋与之風評計梅橋茂相咄、其場所  
ハ何方共不存事ニ為有之筈、然処甚太夫堀出候ニ付而  
者、右通風評為有之場所即其所之事ニ可有御坐、就而  
者所役共より御石塔被取除候砌形行遂言上、訖度御  
穿議ニ可及訳柄之事御座候得共、夫より拾八九年以前  
寛文十年、右御石塔之由緒御取揚無之、御規模帳被  
相除候段、寺社方より申渡相成居候上、右次第潜ニ忍  
參為取除茂所中氣不相付、旁越度有之候故披露茂不遂、  
夫形為差置ニ可有御座、左候得共、祁答院七左衛門拾  
五六歳罷成宝永二三年之比迄ハ、其親勘解由左衛門杯  
者拾八九年以前迄現在為立居御石塔之跡見覚罷在候

故、墓參之序共悴七左衛門江折々咄聞せ置候与之申分、  
随分左茂為有之筈ニ御座候、然共前件八町坂之伊東方  
銘書を初發此御方より被為消除候事ハ、有屋田仲左  
衛門与住持白岩計ニ為被仰付御隱蜜之事与、寺社方古  
帳ニ右通相見得候間、其時分之人誰茂普く可存訳無御  
坐、增而安永之度猶更存間敷、夫ゆへ小田申分ニ茂考

合せ無之事与奉存候、

(嘉永六年)  
癸丑十月九日追考

右之四郎右衛門安永三午年六拾八才ニ候得者、宝永四  
亥年之生ニ而、其拾壹式才ハ享保二三年ニ相當、筑兵  
衛其年五拾計御座候得者、寛文九酉年之生ニ而、同十  
年御石塔立居候年ハ僅式歳之時ニ相當、其より寶永  
二三年迄三拾六七歳之間に、何方ニ欵轉ひ埋れ見失ひ  
為申者無紛、尤筑兵衛茂三拾六七歳成迄之内之事ニ而  
何欵承及居候事為有之茂有相違間敷、然共四郎右衛門  
幼少ニ而承違之有無茂難計、子細者右申出候通、伊東  
領之節ニ御坐候ハ、何ぞ潜ニ忍を遣候ニ者及不申筈、  
其上此御方御領内相成候而茂、寛文十年迄御石塔立

居候者無疑候間、偽説差知申候、乍然前文通、筑兵衛二才之時より三拾六七罷成迄之間に見失ひ為申二付而者、伊東領之悪少年共潜ニ忍參、和尼ニ取除為申趣を四郎右衛門拾一式ニ而聞誤候半茂不相知、去夏堀出候御蓋石之事を頭石を為埋与申ニ者無御坐哉、四郎右衛門事前件七左衛門よりハ拾六才、九左衛門よりハ拾三歳年少ニ御坐候得者、傳聞之誤等茂右次第ニ成立申候、寺社方吟味茂右躰之誤を承られ而之事ニ候へハ、本より難受説ニ御坐候、

右通、御記録方さへ寶曆九年より初而相知為申 御石塔ニ而、其砌茂弥御靈骨又者御遺髮等被為納候事ハ不相知成ニ而為被召置趣者、義岡彈正殿より右様被仰渡置御座候処、此節何之伺茂不申上、右之 御石塔を直ニ 義天様御遺躰御藏之御印シニ必定有相違間敷と差究候義ハ、何共卒尔ニ同意難仕、其上右吟味之通、弥長祿・文明之火難ニ被為逢候而、一所ニ集上候 御石塔ニも御坐候ハ、御遺躰御納之地盤石迄燒亡者不仕筈、殊更長祿迄者 忠國公茂被成御坐、文明之時者

豊州季久茂御存命、皆共御直之 御子様并 御孫様達段々被為揃、其上清水御屋形より呼て聞得候程之間近き御菩提所、暫迎茂退轉無之□ 御代々様御崇敬被遊來候福昌寺江元來御遺躰御藏被為人候ハ、縦令幾度火勢相掛候共、時々御廟所御再興□<sup>(カ)</sup>可被遊、如何ニシテ茂、夫限ニ大切成 御遺躰之場□<sup>(所カ)</sup>を被為捨置道理絶而無御坐、左候処、元來之御場所を何方共傳失仕耳ならず、 義天と有之御石塔迄、差而為存人茂無之様相成候事旁以疑敷、前件通元祿中ニ書綴候行業記、又者空寂成向之起齋唱文共計を以、外面より之御治定者迎茂難被遊御事ニ可有御坐、子細者 大岳様之御石塔茂現在深固院江被成御座候得共、 御遺躰者加世田六角堂江大甕ニ御納ニ而被成御座<sup>由</sup>、是茂寛文十一亥二月、杉本寺より御廟所御修甫□願出候節迄ハ寺社方御取擧無之事、前文通悟性寺同前ニ相見得、又 大中様之 御廟所茂福昌寺江被成御座候得共、御葬禮者於日新寺被為在、<sup>(島津殿入)</sup>心岳様御廟所茂福昌寺ニ有之候得共、帖佐総禪寺等江御遺躰者被為納候類、外面よりハ難差究事茂段々不少候付、旧記等ニ而何れ篤与證據を被為

取候而、何分御治定可被遊事と奉存候、

右者、去秋御届申上置候儀、別冊之通吟味相替、私之考与者各別主意齟齬仕、勿論去秋ハ大概之御届ニ而、細事申上残候事共多々有之、且別冊相替候儀共ニ付而ハ、第一 御領國自他差別之御由緒ニ茂相掛、往古之御事与者乍申、誠ニ不輕境ニ御座候間、何れ辨解不仕候而者、私之考茂連續仕兼候ニ付、御繁多中長文茂如何敷御座候得共、段々引證共書載せ考合候趣右之通申上、間ニ者無用且重言等茂猶可被多乍存、逐條別冊与御引合、篤与御吟味有御座度、全躰穆佐之儀者嶋津御庄寄郡ニ相付、御元祖得佛様御地頭所日向方之内ニ而、自其御以来、前件ニ茂申上置通、御代々様御由緒被為在、義天様 大岳様御代之頃迄者 御傳領被遊来候程之所ニ御座候得共、道義様兼々御沙汰被為在候様、御自國ながら伊東家より最寄ニ而致押領事節々有之、義天様伊集院頼久又ハ總州家・渋谷方御退治等ニ年月被為送候隙を伺ひ、穆佐高城ニ忍寄、伊東より燒拂、一旦押領仕候事有之、至極御無念被 思

召上、山西渋谷等御討鎮之上者、薩广者 大岳様へ被為讓候而、御自身様者山東江御移住可被遊旨被 仰出置、應永三拾年冬頃より日州油津へ御發向、於曾根山御超歳、翌三拾一年正月、加江田城被為攻陥、御居城被罷成旨被仰出、御普請御成就候処、其頃菊地より使者參、志布志新納近江へ御馳走振被仰付、於宝満寺御對面ニ付彼地江御光越、其時分 大岳様之 御前様近江御娘ニ而、御夫婦様共中城ニ被成御座御砌故、御替合 大岳様加江田御城ニ被為入候処、其御方ニ茂大友家より使僧參り、伊東祐安同道被罷出御和睦被為調、其後御互御移戻之事ハ不書置候得共、御馳走濟ニ者如本 御新宅江被為帰、冬比より御風氣御煩次第ニ被為重、翌三拾二年正月廿一日御逝去為被遊ニ可有御坐、聖榮・應永之両記茂皆、山東御發向之末ニ御逝去之事書連候文勢ニ而相見得、可惜者 御逝去之地名并御葬埋之寺名書載せ無御坐、但應永記ニ者市来久家拾歳計ニ而御龕前ニ罷出、拜禮為仕事ハ書載御坐候へ共、御葬場何方共不書置、左候得共、前文通山西御平治之上者、山東ニ可被成御座旨兼々被仰出置、 思召之通

御居城ニ御普請候而、其冬より御病氣、翌正月御逝去為被遊趣應永記書載、聖榮茂、加江田ニ者暫為被成御座与被書置、旁参考仕候得者、於本宅卒と年代記ニ御座候者、前年御居城ニ御成就為有之加江田御城之事ニ相當可申、左候而、穆佐之儀者右次第御元祖様御以來連々御由緒を以御傳領及多年、御移住被為在、殊ニ大岳様御兄弟ハ御生れ故郷ニ而産土神等茂被為立居、一旦之御退去さへ生々御無念為被思召上、御城之事候間、加江田御攻取御和陸相調候上者、本より御縁家之伊東家、就中氏大岳様方御為ニ者、正敷祐安者御外祖父様ニ而、無御據御間柄ニ候間、右之御城者決而御取返相成居、悟性寺ハ御葬埋為被遊ニ可有御坐、自其式拾一年目文安二年、祐堯代穆佐對治与有之、夫茂同五年ニ者御和陸為有之證據相見得、其上長祿四年忠國公御再興為被遊若宮八幡之古棟札写等茂有之、無程御取返為有之ニ者別条無御坐、左候而、其以後自其五年目寛正五年、立久公祐国・祐堯と御參會ニ而、諸堺被仰談候事日向記ニ有之、其以後欵、又彼方より押領知いたし、祐堯曾孫義祐代迄其通ニ候

処、別冊ニ茂申上候通、天正五年義祐没落以後貫明様御代より、又々古来之通御領地相成、其没落之前年、落合勘解由右之御石塔ニ義天之二字有之事と忠國公御誕生之地ニ為被被植置（行カ）榎木城中ニ盛居候事共を、古来嶋津領之證據ニシテ、薩隅と日州半國者嶋津領ニ而、伊東領者僅其半國、小者本より難敵右沢共申立、和談を勸候へ共、聞入無之致落城候趣軍記より見出、貫明様御譜ニ茂被載置、皆共實説ニ而、第三條ニ申上置通、伊東古系図ニ、日州五郡之内ニ而嶋津領ハ四千式百八拾二町、伊東領ハ四百式拾六町、土持領二千五百四十町と相見得、又榎木之事茂穆佐郷土吉野監助覚書ニ、天正八年より拾年迄御城内へ為被移置廿五□之内より、慶長五年正月中旬失火有之、榎之大木ハ燒枯候ニ付、杉木を植替候事書留置、今ハ御誕生杉と相唱繁茂仕居、勘解由為申置通皆能致符合候間、御石塔ニ限而無證據之事共申立筈ニ無御坐、然処諸所祈願所・菩提所式ヶ寺之儀者、元和五年、四分一上地之節、知行三分一宛被殘置、寛永十年・萬治二年御檢地ニ茂寺地無竿ニ被付置、畦段見計之書出と相

見得候間、悟性寺茂菩提所ニ而、知行寺地等者其通為被仰付置ニ可有御坐、左候得共、其以後連々江戶表御失墜無御據候而、御修補等難被為調神社佛閣段々有之ニ付、御吟味之上、承應二巳年より御領内一統人別壹分出銀被仰渡、御物座御支配被成、御談合衆より差引ニ而、修補等被仰付向ニ相成、寺社帳逆茂無之ニ付、明曆元未年、鎌田筑後殿より御廻文を以御領内細々御糺有之、其節 御位牌様等被為立候由緒共委敷為申出処ハ、證文為被渡置茂有之、初而寺社帳被為仕立、寛文六年寺社方被召立、右之御帳類御引渡、御條書中ニ、前々より修理被仰付候所ニ而も、於無由緒者不被仰付向之事共相見得、規模帳等者無御坐、同七年十二月、寺社奉行嶋津新八郎江戶詰ニ付、嶋津出雲江次渡候節、新八郎より申出趣有之、出雲与申談、規模帳相調差出候様被仰付、同八申九月、式冊取しらへ差出置、同九西六月、御菩提所有由緒寺社修補規模帳江者御家老衆御奥書御判形を以被渡置、諸郷惣廟・祈願菩提修補規模帳之儀者、出雲判形ニ而御治定被為<sup>レ</sup>究候処、其翌十年戌四月五日、悟性寺傳悅より、 義天様御寺ニ

而于今 御石塔耳者御座候趣を以御修補願出、同十二日、横目・暖共茂相違無御坐趣致繼書、同十三日、其比及五年為移居地頭伊集院宮内より茂被申出旨承届、無別儀候間、修補被仰付度趣之繼書ニ而、住持傳悅大概三四日路ニ茂出府仕、同十七八日ニ茂寺社方江差出為申日割御座候処、右被為究候御規模之通、菩提所ニ付候客殿修補之分之御合力銀五枚者無口能被相渡、其外寺社帳并御規模帳ニ無之修補等者御取挙無之、且義天様御寺と申出候義共ニ付而者、左様成證文無之ニ付、規模帳被相除候旨、同十九日申渡有之候事、今以假屋搭護之古帳ニ相見得、今更參考仕候得者、明曆元年之御糺ニ、所役共 御石塔之由緒等決而疎略ニ申出、筑後殿證文茂不被渡置、新八郎・出雲取しらへ候節ハ證文無之故、有由緒規模帳ニ不被書出候而、世并之菩提所ニ被書出、其通御治定被為究候跡越ニ右通適願出候得共、最早御規模茂被相定候涯ニ而何之御糺茂無之、直ニ右様申渡為有之ニ者弥別儀有御座間敷、左候而、其前後之事ハ分明未糺付候得共、 寛陽院様杯御通行等被為在候御砌迄者、每茂悟性寺江 御墓參為被遊事

茂野村半五左衛門より悟性寺鑑司中へ問合候書付ニ相見得、何分ニ茂其頃迄現在 御石塔立居為申事、實者弥以無疑茂、右之傳悦・宮内・半五左衛門其外其上右之傳悦事者寛永八年生ニ而、幼年より文祿三年生之悟性寺隱居江相付居、文祿者天正と程近き年間候得者、落合勤ケ由為申程之事者大抵承傳居候而、傳悦ニ茂語聞せ置候事情差知居候者ニ而候、其外同比之地頭宮内郷士半五左衛門又者高岡郷士祁答院勤解由左衛門など、慥ニ見覺罷在候證據歴然御座候処、其後右之 御石塔何方ニ坎埋れ失ひ候儀者前文ニ茂申上候、勤解由左衛門并梅橋筑兵衛、花見村之九左衛門等咄傳候趣を取合せ、参考仕候得者、寛文十年より寶永二三年迄三拾六年之間ニ、伊東領之者共潜ニ忍參候而 御石塔取除、何方江坎頭石を堀埋為申与之説茂決而有謂事ニ可有御座、左候得共、最早右次第御取拳無之 御石塔ニ候故、其比之住持等茂無頓着ニ而、夫形何そ糺茂不仕打過居候事ニ御坐候半、左候得共、右宝永二三年之頃迄ハ、勤解由左衛門其子七左衛門拾五六才罷成時分ニ而、父子列立墓參など仕候節、此邊者 殿様御墓有之候場所

ニ而大切成所之故、龜末之鉢ニ而徘徊等仕間敷旨呉々咄申聞置、又住持茂其頃迄者 御墓之為在跡共承傳居、右之九左衛門幼少ニ而悟性寺江致供候砌、藥師堂之邊殿様御石塔為有之由候間、猥ニ踏入、筭なとかき申間敷与幾度茂咄聞為被申与之事共、皆以無相違儀ニ可有御座、左様御坐候而、右之宝永二三年より明和九年御石塔糺方之■内達有之迄六拾六七年罷成候処、右通之咄傳茂所中且住持さへ茂承及候者ハ無之、右 御墓之為在跡茂傳失仕候故、役々立會、初発堀方為致候節迄者茂悟性寺堺内無訊茂場所共段々堀尋為申由候へ共、何茂不見當ニ付取止置候処、翌安永二年巳十一月、右之祁答院七左衛門悟性寺ニ參、別而極老之者ニ御坐候故、住持より何ぞ承傳候義者無之哉尋掛候得者、前文之通親勤解由左衛門呉々咄聞置候趣任申、住持茂成程藥師堂之上竹山中ニ九尺方計少シ土之堆キ處有之、此所ニ有之茂可□不審差起折柄、同三年午正月、右之場所より六間計茂相下り大楠一本代銀上納候而、小林之者江申請被仰付、既ニ中句より本直有之段掛合御坐候ニ付、住持茂右之七左衛門相咄候趣、何れ聞捨ニ者難仕、取

役并押方ニ茂申出、段々吟味手當之上、同廿一日、右之堆キ處僅壹尺程茂為堀候処、直ニ石塔之地盤共相見得候石より堀出、猶深為堀候得者、御骨被為納候大甕迄堀出、不思議哉 義天様三百五拾年御回忌之當日ニ而則及披露、大六・次太夫被差越、直ニ右之七左衛門召寄せ相糺候処、七左衛門者元祿四年生ニ而八拾四歳、九左衛門者同七年生八拾壹歳罷成者共ニ而、銘々右之通申出、皆以乍口碑、寛文十年頃迄現在立居候御石塔見届居為申住持傳悦・地頭宮内杯、同頃之勘解由左衛門等より直ニ咄聞せ置候一筋を慥ニ承覺罷在、右様為申出趣實以天正四年御譜之通、落合勘解由者嶋津領之古證ニ申立、野村半五左衛門者毎之通 御墓參被遊賦と申渡、住持傳悦・地頭伊集院宮内等者悟性寺由緒之證據ニ申出置候 御石塔之其比立居為申跡、逐一旧記等ニ茂符合為仕場所より常人ニ相替、段々念之入候取替ニ而、大甕ニ被為納候御骨堀出、且 忠國公六角堂之御墓茂矢張甕ニ被為納、是茂寛文十一年修補之願迄者御取拳無之、旁似寄為申御墓ニ付而者、餘程義天様御靈骨ニ無疑相見得候間、訖与可被為究之處、

何分ニ茂其節迄者、勘解由等申置通之 義天二字ある肝要成御石見出不申計ニ而、残碑断片言隻字之證據ニ可被為取物無之ニ付、弥御廟所之方ニハ御取究難被成、左候得共、何れ無御據龜抹ニ者難被成置、段々御手厚キ御改葬ニ而、如本被納置成行之石碑被建置、其趣を以、詔觀者而使有以考焉と被刻置、別段訖与御位牌被召立、且為御佛餉米年々三石宛被下事ニ相成居候処、去夏又々御糺ニ付、右之近辺より御蓋石埋れ居候を堀出、又 弔天と有之輪石茂相應隔居候地形漸々卑キ所江轉ひ埋れ居候を堀出、右之御蓋石と組立候処恰好宜敷、殊ニ石性茂同様ニ相見得、決而古采右之堆き所江御立居為被成 御石塔ニ而、地盤石之儀者、安永三年、御骨之上より堀出為申石ニ茂可有御座、左候得者、天正中ニハ落合勘解由、寛文年間者住持傳悦・地頭伊集院宮内・郷土野村半五左衛門、其外高岡郷土<sup>毎々</sup> 祈答院勘解由左衛門など現在拜見仕、勿論 寛陽院様御墓參等毎々為被遊 義天様御石塔与申茂此御石ニ而、直ニ此場所之事ニ可有御座、左候而、右之頃迄ハ 御崇敬茂被為在候処、寺社方規模帳等ニ御取拳無之、後

数十年轉ひ埋れ、御石見失ひ居候時節茂御坐候へ共、

右之勘解由左衛門宝水中迄者存命ニ而、其子七左衛門

江御石之為立居場所ハ吳々申聞置候一筋を、安永年間

迄慥ニ承覺罷在、只其口碑計を以奉堀出置、此節猶又

現ニ 弔天二字相殘候御石等奉堀出、彼此之御由緒右

次第ニ付而者頓与最早何そ可被為疑廉茂有御坐間敷、

乍然別冊之吟味与者格別相替、何そ勝を争ニ者無御座

候得共、所存之程互ニ相違仕、今形ニ而者公論之可帰

期無之様成立候間、此冊と逐條御引合せ、第一前後之

舊記を本ニシテ萬端推計、篤与事實之當否明細ニ御吟

味被為在度、左候而、古来御城近邊ニ暫迎茂退轉無之、

御代々様御崇敬被遊来候福昌寺江、實々御遺跡御藏被

為在御事候ハ、御佛餉料とシテ桜嶋之野尻村迄為被

附置、格別大切成 御檀那之御廟所ニ御座候間、和尚

を初寺中之僧侶縱令幾度火難御座候共、第一ニ再興等

奉願、聊茂捨上置筈ニ無御坐、勿論時之 太守様奉初

御一門御役方、其外御城下中之諸士ニ至り、御正統

様御遺跡御納之御墓を世(片言カ)ニ之口碑茂無之迄傳失可

仕訳者何様考申候而も可有之事ニ無御坐、尤人情計ハ

古今茂同然御座候処、何共不審之至、就而者左程ニ存

外成行事之輕さと、彼遠境之悟性寺、殊ニ久敷他領ニ

迄成居鑑司勝之寺ニ有之、御墓之場所を近郷之士民

迄茂連々口碑ニ承覺候者之残居申程之重さと實否を掛

合せ、強弱如何可參哉、此上者兎角 御英断之上、何

分奉蒙御沙汰度奉存、是迄段々手廣相札取しらへ候成

行、甚事長罷成候得共如此書立、右之別冊と去秋之御

届書迄者未糺付事茂御坐候得共、相添此段申上候、以

上、

但伊東氏古系図者、伊東家之庶流山城四郎兵衛祐真

与申者不慮之誅を畏れ、慶長十一年、日州清武よ

り庄内江致来奔、都城江主人相頼候時分持越(候カ)古

系圖之拔書ニ御座候、日向記者御領本城之榭屋榎

藏と申者、清武之秘本を竊ニ借受写置候を、高岡

郷士長田主右衛門与申者、右之榎藏与和学之知人

ニ而見當無據申掛、両三日借受、郷士中七八人申

合せ、天保七年八月比寫取為申舊記御座候、

(天保十三年)

寅

三月十五日

御役名

姓名



右之通稿成居候得共、本田孫九郎 御目見、且 新納久脩君 御直元服旁ニ付淨写隙取、乍漸寅三月十五日中取相濟、先生へ持参候而渡置也至、可秘く、

(天保十三年)  
壬寅三月十五日

平季安書

右式冊、穆佐押樺山四郎左衛門と申人より、其従弟安藤十郎殿ニ而承趣有之遣置候処、為被寫由ニ而被相返候、然処四郎左衛門殿より前文宮内子孫伊集院犬四郎家ニ被相糺出為申由ニ而、古書寫脇方ニ而一覽、太躰季安見覚候文言左之通、

近々 太守様御上洛〔通行被遊ルニ付〕ニ付、何茂之通 悟性寺へ御

墓参被遊賦候間、為御先番龍福寺へ日限被定可罷〔立〕

越候付、聊無間違様可被致候地頭〔方首尾拙〕可承事、我等可

承候事云々不覚、  
〔以上〕  
〔亥〕三月 日不覚、

野村半五左衛門

悟性寺

閑司中

〔追而伊十院犬四郎より承合せ、本書之通写置可申事〕

右外、半〔五左カ〕衛門より伊集院宮内宛之悟性寺 御三靈之事共見得候茂有之、右之御参勤御上下帳如左有之候、

77 正保四年丁亥

一 正月廿八日 光久様御上洛東目、

家老鎌田源左衛門政有

一 三月十七日 江戸へ御参着、

明暦元年乙未

一 二月四日 光久様御上洛東目、 家老嶋津中務久茂

一 三月廿八日 江戸ニ御参着、

二年丙申

一 閏四月十六日 光久様江戸御出立、 家老嶋津中務久茂

一 六月八日 御着城東目、

○寛文元年辛丑

一 三月三日 光久様御上洛東目、 家老嶋津筑前久頼

一 四月廿五日 江戸へ御参着、 同 嶋津中務久茂

二年壬寅

御使衆喜入休右衛門  
伊東三左衛門

一二月四日 綱久様御上洛東目、家老伊勢兵部殿

一三月廿八日 江戸へ御参着、

○九年己酉

一三月廿二日 光久様東目御上洛、家老町田勘解由

忠代、旅御談合衆肝付半三郎兼方、御使衆諏方采女・

同相良吉右衛門・同旅喜入次兵衛

五月廿五日 江戸へ御着、

十一年辛亥

二月廿六日 綱貴様東目御上洛、家老嶋津圖書久

通、御守役嶋津豊前久邦、使衆平山次〔兵衛力〕忠〔和力〕旅

使衆本田右衛門親平

三月廿七日 細嶋御出船、五月四日 御参府、

寛文十二年壬子

一三月廿一日 綱久様東目御発駕、家老嶋津新八郎

久馮、旅談合役種子嶋左近久時 四月八日 細島

御出船、五月十六日 御参府、

十三年癸丑

四月十六日 光久様東目御発駕、旅談合役嶋津大

学忠守・仁礼覚左衛門景治・喜入次兵衛久甫・相

良源五左衛門頼安 五月廿八日 細島御出船、

延宝四年丙辰

四月廿五日 綱貴様東目御発駕、家老嶋津新八郎

久馮 六月朔日 細島御出船、

元禄二年己巳

三月三日 綱貴様東目御発駕、同十二日 細島御

乗船、

右之通東目御通行相見得、其内ニ而寛文元丑年・同

九酉年両度之御上洛ニ三月被為通候間、右野村より

三月申渡書付ニ、近々と為申ハ此兩年之間ニ相當可

申、左候而、元年三月ニ御座候ハ、寛陽院様御通

行東目御四度目ニ被為當候間、何茂之通と為申ハ其

以前正保四亥二月・明暦元未二月・同二申閏四月ニ

茂 御墓参被遊候半、左様成御例を每茂之通と為申

ニ可有御座、無左候ハ、寛文九酉三月、五度目之

御通行前之書付ニ相當可申、旁以同十年戊四月迄

御石塔堅固ニ為被成御座事、住僧傳悅為申出通、弥

無疑證據相知れ、其上右通東目御通行之節々、寬

陽院様御墓參迄為被遊事茂相知れ、彼是明證御坐候、

然処同年戌四月十九日、寺社奉行所より儀義天様御

寺と申證文無之ニ付、規模帳被相除候間、其段可被

申渡趣地頭伊集院宮内へ被為申渡候事、今更季安愚

按仕候処、寛文六年寺社方被召立候より拾貳年以前、

明暦元年之寺社等之御改、左之通御廻文御座候、

78 (本文書八一七号文書ト同文ニツキ省略ス)

79 (本文書八一八号文書ト同文ニツキ省略ス)

80 (本文書八一九号文書ト同文ニツキ省略ス)

81 (本文書八二〇号文書ト同文ニツキ省略ス)

右御廻文ニ付、鹿籠より諸宮之帳・堂之帳・諸寺家之

帳三冊書出候扣留有之、銘々奥書如左、

鹿籠

田代惣右衛門(前堅)

明暦元年九月九日

伊集院与左衛門(久州)

右向ニ、一外城より三冊ツ、何方より茂書出為申答、

其内ニ而被及御吟味候而相決候事共ハ、左之通筑後殿

より證文為被渡置と被致例察候事ニ御坐候、

82 (本文書八一二号文書ト同文ニツキ省略ス)

83 (本文書八一三四号文書ト同文ニツキ省略ス)

84 (本文書八一三五号文書ト同文ニツキ省略ス)

右類之證文、段々鎌田正勝家譜ニ相見得、惣躰御領内

神社佛閣寺院等御改之儀者、明暦元未年、伊地知軍弥

等檢使とシテ被差廻、且右躰御廻文を以被仰渡候御案

文之通、某々書出、或ハ萬治二年御引并竿之頃迄、茂由

緒書出候寺等者、右御改正之帳面ニ被召載候向ニ相見

得、右之時分神主住僧等文筆ニ茂相達候者ハ、傳來之

由緒等随分申出、尤 御位牌様等被為立候寺坏者、申

傳計ニ而も依御吟味候得者、右之通訖与證文為被渡置

筋御座候、就而者悟性寺之儀、現在 義天様御石塔御

立被為居候ニ付而者、猶亦訖与證文可被渡置事ニ御坐

候へ共、右様神社寺院御改正之折節、古來之由緒等細く可申出程之住僧等茂如何様不罷居候欵、決而申出洩候筋ニ可有御坐、夫故筑後殿茂御存不被為知候而、不被為及御吟味等ニ茂證文杯被相渡段ニ未成立、右時分之御改者打過キ為申欵、左様御坐候而、其以後拾弍年目寛文六年、寺社方被召立候節、前件御改正之帳面等直ニ御規模帳ニ為被召成事共ニ者無御座哉、左茂候故欵、自其五年目寛文十年戊四月ニ相成、住持傳悅右躰之願書、移地頭繼書を以寺社方江差出候得共、其以前筑後殿被為改候時分と事替り候、最早御規定片付候故ニも御坐候哉、右之願書為差御札茂無之、義天様御寺と申證文無之迎、願通ニ者御取拳無之、規模帳被相除候間、其段可被申渡旨為被仰渡与相見得、殘多事御座候、就夫前文申良之寺社ニ為被渡置證文等ニ而考合せ候得者、右之仰渡ニ證文無之と御座候者、明曆中又ハ萬治之比、筑後殿より右躰被渡置候證文之事ニ可有御座、左候而、寺社方茂其時代迄者專右類之證文次第ニ御裁断茂為有之躰ニ被相考申候、然共筑後殿より明曆二申四月十八日、花尾社ニ為被渡置證文共者、丹

後局御法号桃源妙悟大姉と被載置有之由、是ハ後世ニ相成、市來家之先祖法号ニ御座候事御札究之由傳承事候、然者訖与被渡置證文迎茂右類之誤間ニ者有之、一概御信用茂難被成、左候得共、寺社方御取建涯何篇證文之有無ニ依り御決断為被成哉ニ被相考、左候而、悟性寺之御石塔杯者、却而右證文之有無故ニ御由緒茂消行候様為罷成躰ニ恐察被仕候、今更淺陋之私考合せ候得者、畢竟前件寺社御改正之節、右躰之行違欵ニ而、彼是不都合相成為申筋ニ者無御座哉、旁以殘多次第奉存、誠ニ私式重疊恐多事無申迄茂儀御坐候得共、猶亦右證文之一義考付候故、乍憚此段又々追考仕、粗卷末ニ書加置申候、以上、  
辛丑六月  
季安追考

※(頭注)  
「忠翁禪師外集ニ段々御祭文有之、皆 惠燈院殿云々と相見得、且起籠之文モ御坐候得共、下火之文無之候故、何方ノ寺ニ就テ闍維スト申詞一切無御座候得者、御<sup>(葬)</sup>場并年月等之事、委數相知不申甚殘多事ニ御座候、下火ノ文ハ多者就某寺以闍維と御座候御法事等之祭文ニ可有御座、尤御法事ハ 御代々様皆 御位牌殿ニ而御執行被為在候旧例ニ可有御座、近例ニ而

相考申候得者、大中様 貫明様 松齡様 一唯様 (家人) 琴月様

持明様など 御廟所者皆福昌寺ニ被成御座候得共、御年回御

法事等ハ 大中様ハ南林寺、貫明様ハ妙谷寺、松齡様ハ

妙圓寺、一唯様ハ皇德寺、琴月様ハ福昌寺、持明様ハ

興国寺ニ而御執行被為在候得者、義天様御法事於惠燈院被

為在候迎、悟性寺御石塔之何ぞ疑ニ相成事者有御座間敷、其

上 義天様十三年欵御法事之祭文欵ニ、福昌和尚を請して同

門之僧を集候而と欵申意之詞御坐候よし、惠燈院者西之方丈

とて、福昌寺之院号と古より寺傳有之所ニ御座候由、然者玉

竜山中ニ而福昌和尚を請してと申詞ハ何方欵、別所之詞欵ニ

被考候由、且福昌寺より同門之僧と申寺ハ無之旨、台巖和

尚被相咄事ニ御座候、

一 恕翁様御相廟ニ被成御座候福昌寺之 義天様御石塔御遺躰、

又ハ御遺髮等被為納置候訳茂分明ニ不相知由、左茂御座候哉、

寛保二三年比、左衛門殿より被仰渡候御書付ニ茂、義天様

御廟所不相知と有之、且代々惠燈院住持よりは迄右之御石塔

ニ御回向等之勤行全ク無之、只今之住持などハ、此御石塔御

坐候事ハ、近比迄茂存知不申由、然者古来 御廟所之御取持

者無之哉ニ被考申候、御廟所御正面ニ 恕翁様被成御坐、左

86

覚

一 久豊公 忠國公 立久公 忠昌公 忠治公 忠隆公

貴久公 久保公

右之御茶毘所何方ニ有之候哉、御用候間御菩提所之住

85

覚

一 氏久公 久豊公 忠國公 立久公 忠昌公 忠治公

忠隆公 貴久公 久保公

右御茶毘所何れ之所ニ有之候哉、御尋究可承候、當座

入用付申入候、尤銘々ニ相知れ不申候而不叶儀ニ御座

候、是又為御心得御座候、以上、

〔元禄八年〕二月十六日

御記録所

寺社奉行

追加

右標注之義ニ付、またノ證據有之、左之通御座候、寺社方

日記書拔之由見當、是亦事長候得共 (以下ナシ)

持江相尋、書付を以急度可被申出候、以上、

(元禄八年)

亥三月五日

座印

福昌寺

覚

一氏久公 右書同断、

座印

志布志

大慈寺

差出

一久豊公御茶毘所相知不申故、移脇より掛心承合候得共、

于今相知不申候、任御尋如斯御座候、以上、

(元禄八年)

亥二月十二日

惠燈院

石改

口上

忠治公 久豊公 久保公 忠昌公 忠隆公

右御灰塚、當寺内西卵塔之内ニ有之松楠被植置候処ニ、年代深遠之故、誰様御灰塚共相知不申、就夫奉存候ハ、御先祖様之儀ニ候条、御灰塚小石塔一ツ宛被仰付被下

候ハ、一々之御法名書付召置度候、左候ハ、後來

ニ茂髓ニ相知申、弥尊崇可有御坐与存候間、其段御披

露頼存候、以上、

(元禄八年)

亥四月十九日

福昌寺

愚海

(本文書ハ「穆佐悟性寺義天様御石塔一件勘考書上下」一九の7号文書ト同文ナリ)

右之通、去年四月被申出候得共、御在國之砌御披露

可被成候条、可請取置旨織部殿被仰候、然処伊集院雪

窓院後住衆評去朔日ニ有之ニ付、〔中取篠原〕〔書役酒匂〕為見分喜右衛門・幸

左衛門福昌寺江被遣候序ニ御灰塚可見合之旨被仰候付、

當免僧祖養・旧免僧大鼻出逢見合候処ニ、忠治公

久保公 忠昌公 忠隆公御灰塚者髓ニ相知有之候、

久豊公之御灰塚不相知候、月香院之後ニ御灰塚ニツ松

有之候、久豊公御灰塚此内ニ而可有之候得共、不分

明之由大鼻被申候ニ付、為存衆茂可有之候条相究、重

而可被申出之旨祖養江相達置候、右御灰塚繪圖ニ相調、

織部殿掛御目、右件申上候處ニ、久豊公之御灰塚茂

不相知儀ニ候、重而相知候ハ、其節福昌寺より被申

出可然候、左候而、折を以御披露可被成候間、右之口

上書可相返之旨被仰候事、

但御灰塚繪圖此内ニ入置候也、且又御石塔之様子、  
繪圖并入目賦、去年申付候書付式通此内ニ入置也、

90 「朱書」福昌寺免僧祖養招當座、久豊公御灰塚不分明候

ニ付承合相究候節、被申出可然候旨織部殿被仰候

故、右件免僧江相達、本行之口上書相返也、

「元禄九年」  
五月五日 「中取家原氏也」  
喜右衛門

右通、久豊公御灰塚不相知候得共、相究石塔立置

度旨、元禄八亥四月十九日、福昌寺愚海和尚被願立  
御取揚無之事、同九子二月、右次第被仰出候事寺社  
方日記へ有之、左候処、同十年丑とし、仲翁和尚行  
業記被致撰述、其文中ニ久豊公之喪事被修候義被  
書置、何之按據有之候哉、式百七拾餘年過去候事共  
委敷書立候茂、前件口上書之類共ニ候得者、援證之  
取やう甚無覺束事ニ御座候、

別冊段々考置、且傳承候趣共相混參考仕候得者、元祖來

穆佐之儀者 義天様御年式拾七八之御比より為被成御

座所ニ而、加江田城未被為入御手ニ以前より 御思慮  
被為在、山西ニ御心遣不被為在様御平治被遊候上者、

薩摩者 大岳様江被為讓候而、日州山東江可有御座向

ニ御議定被成置候而、應永三十年秋欽冬之比より、油

津江御發向、於曾根山御越年、翌三十一年正月、加江

田城被為攻陷、直ニ御居城ニ可被成迎御普請有之、諸

士昼夜相働御成就有之、諸軍者被差返、暫被成御座候

内、菊地より立田某使者ニ參り、新納近江守忠臣江御

馳走振被仰付、寶満寺内ニ而御對面被為在ニ付志布志

江 御光越、其以前忠臣之御娘 大岳様御前様ニ被為

立候得共、鹿兒嶋御殿造御遲延ニ付、先志布志江被為

越候而於中城御祝有之、暫被成御座候間、 義天様と

御替合、加江田城江者 大岳様被為入候、左候処、同

比加江田ニ茂大友家より使者參り、又伊東大和守殿茂

御見舞ニ而、 義天様者御出候ハて、 大岳様御對顔

為被遊事共聖榮自記ニ相見得、應永記ニ者、同卅一年

辰、匠作山東ニ取向、加江田城被為攻落候節、面々辛

勞非一、今年者可有休息トテ皆有御帰也、從冬比匠作

御風氣次第ニ被為重、同三十二年巳正月廿一日、御年五十一ニ而御逝去被遊候事書置、又市來家之事ニ付、義天早世之御時、久家十歲計ニ而龕之前ニ致拜礼候得者、見人袖を濕候趣者書載候得共、御葬埋之寺地者何方共不相見得、又其比之事聖榮者前文通、加江田之域柁出来次第陳衆者返可申と上意ニ而候之間、夜もなく被柁、無程成就ニ付御暇給被返、御屋形ハ暫加江田ニ御座候而、貴久ニ御替候と被書記、且卷末ニ、義天ノ御代之事ハ聖榮か御奉公之内ノ篇目存知ノ事候と旁慥ニ相見得、此外 義天様其後志布志より何方ニ被為婦、又何方ニ 御居城被為移候事共不被記置、就而者右之中城前文通 大岳様大奥等敷御構ニ候得者、一旦之御越ニ可有御座、殊ニ其比御無事ニ被為向、御上洛之御企共被為在折柄、御年五十一、正月廿一日ニ御遷化候耳と被書置、是亦御葬埋之場所者不被記置、然共前文通山東江者被成御座度兼而 思召茂被為在、御修築為被仰付 御居城ニ而、其後式拾壹年計者 御領内与相見得、文安二丑九月八日、伊東祐堯穆佐城攻取候事其系傳ニ有之、自其拾三四年相當長祿之比者、

又日州御安堵と書候舊記茂有之由、旁以御逝去之頃者、專御領分殊ニ伊東家と御和平之時分ニ相當候間、無程志布志者又御替合ニ而、右御新宅之御居城ニ被為婦御逝去共ニ而、穆佐江御葬埋為有之ニ者無御座哉、加江田者當分祇肥領ニ而、穆佐より東南五里計ニ御坐候由。夫故右之祐堯曾孫三位義祐、天正五丑十二月佐土原落城迄百式三拾年計伊東家被致押領居、猶茂敵對被申ニ付、同四年、家臣落合勘解由專義天二字ある石塔穆佐之寺ニ有之事を第一古來島津領之證據ニシテ、主人義祐を為諫事古軍記ニ有之、貫明様御譜中ニ茂被為収載有之由、然處御領國中神社佛閣修理・祭禮之事、寛永十六欽卯十一月、御職分ケ被為在時分ハ、平田狩野介・猿渡新介江被仰付置、其後承應二巳九月、修理再興等之儀江戸御失墜不大形ニ付、為修理料一統人別壹分出銀上納被 仰渡、御物座今之御勝手、御下知之上御談合衆差引ニ而、修補等為被仰付由、左候而、明曆元未七月、鎌田筑後殿御記録方惣宰ニ而、平田清右衛門御家譜編集方ニ被為掛居候砌、御領内神社・寺院・堂宮等之由緒茂可申出旨、細々御札之ケ条案文帳三冊被相添候而、諸郷江御廻文を以被 仰渡、



夫より萬治御竿之頃迄追々由緒申出次第、御位牌樣等被為安置候寺共者、筑後殿より某之證文被渡置、御領内寺社一統御改選為有之与相見得候間、悟性寺茂右之御石塔被為立候由緒共其砌申出候ハ、訖与御吟味茂可有之処、如何様文盲之鑑司等罷居、申出洩候筋二者無御座哉、夫故筑後殿茂御存付無之證文等茂不被渡置候半、自其拾貳年目寛文六年八月、御領國中寺社之支配入来院石見殿江被仰付、即寺社奉行之開祖ニ御座候間、右御改選之帳面等為被相渡ニ可有御座、然共專壹分銀等ニ而修補等之差引、又者口事類殘居共於宅被承向ニ為被仰付由、同七年七月、石見殿死去、跡暫者筆者河野六兵衛・澁江源太夫承之、同九月、嶋津新八郎殿江被仰付、同八申正月、同人上洛ニ付、跡代り嶋津出雲殿へ被仰付、不相替於宅被為勤、大乘院より、西壽院如来堂阿弥陀者、寬庭様御影と申出候得共、日新記ニ茂不相見得候ニ付、同年四月、修造難申付、乍然此節寺社修造之規模相究候間、若無據儀考出候ハ、其通可申付旨被仰渡、又同年五月、加世田(争力)常福寺より茂、寬庭様御形代阿弥陀之由申出候得共、御書留無之

ニ付修造不被仰付事共、彼御座古日帳ニ有之由、左候処、義天二字ある御石塔之儀者、貫明様御譜之通、寬陽院様御代之頃迄者現在悟性寺江相立居、每度御墓參為被遊与相見得、寛文元丑年欵、同九酉年欵、兩年之間三月御発駕、東目御上洛之比ニ茂可相當、三月日付ニ而、近々太守様御上洛ニ付、何茂之通悟性寺江御墓參被遊筈也、野村半五左衛門与申者より御先立之手當悟性寺閑司中へ、地頭之名代ニ為申渡古書付茂有之由、同十年戌四月五日悟性寺住持より寺修補之願書ニ茂、于今、義天様御石塔(壱基)事之由、御座候耳与書出、同十三日五ヶ年移居候地頭伊集院宮内繼書ニ茂、右被申出旨承届、無別儀与申出候事茂有之、然共前文御改選之節、由緒申出洩證文等茂不被渡置、且其比寺社方之御吟味茂、第一修補等被仰付来候寺社家ニ而茂、可成御省略被為在御砌之故欵、右之願書住持傳悦大概三四日路ニ茂致持參、同十六七日ニ茂為差出筈、然處翌々十九日二者、義天様御寺と被書出候得共、左様成證文無之ニ付、規模帳被相除候趣被仰渡候由、是ハ、義天様御寺と申儀者古来惠燈院ニ而候事差知居候故ニ茂

可有御座、勿論惠燈院者 御位牌殿ニ而、應永記ニ茂、廿年巳十二月、伊集院方より鹿兒嶋本城忍落候事を於吉田被聞召付候節、定而屋形ニ取入福昌寺燒拂、惠燈院打破候半坏と御心痛為被遊事共より相見得、毎日御靈供料とシテ 大岳様より向嶋野尻村御寄進被為在、或者 御夫人壽山久公大師（師カ）様菩提料とシテ鹿兒嶋坂本之内山下水田三段、永享十一年二月持久より御寄附有之、 義天様御夫婦様之 御位牌殿ニ而、御年回毎ニ御法事等茂被為執行候事共ハ、 仲翁和尚祭文等ニ茂相見得、明白成御寺ニ御坐候得共、何分ニ茂 御廟所分明不相知ニ付而者、訖与右為申出 御石塔茂御札究可被為置之処、決而其以前明曆之御改選ニ證文被渡置無之、且寺社方茂大概之事迄ハ一人之分別ニ而被相濟、修理等被仰付来候寺社家茂遂會議、可相止趣之御條書も有之由候得者、出雲殿一人ニ而證文無之迎不及御札ニ茂、前件西壽院・常福寺阿弥陀等之類同様ニ、直ニ御取拳無之候半、左候処、筑後殿より右頃之御改選ニ為被渡置明曆二申四月十八日花尾社之神鏡證文ニ者、丹後局御法号迎桃源妙悟大姉と為被載由、此事共者享

保十二未十二月ニ至り、市来家八代忠家法名笑山忻公妻之法号ニ候半与之古證被見出、筑後殿書付誤ニ候間燒捨被仰付度旨由調有之由、然者訖与為被渡置證文迎茂如此誤茂有之、一概ニ御信用難被成事ニ候故、傳悅願之趣茂御家老衆へ被仰上、御記録方へ御札方被仰渡候ハ、御石者立居明白可相知之處、右躰之急卒誠以遺憾之至、右御取扱より住僧共茂其後者頓与力を落候而、現在被為立居候 御石塔之拜掃等疎略成行欵、又者岸岡ニ而茂崩埋候欵、其後九拾五年目安永三午年、御靈骨被為出迄之間ニ而、大抵寶永以前より見失ひ上候筋ニ被相考候得共、古老共 御墓為在跡者此邊与能々申繼置候哉、其跡より近邊之楠木本直御見分有之節、住僧より右之楠本直於有之者、 義天様御石塔為有之所と代々申傳候場所へ必可相障候間、右之木本直者不罷成（幕カ）旨類ニ申幕難及手ニ、終ニ者同正月廿一日、右之場所為堀候得者、 御石塔之地盤并大甕有之、本より御石塔・御灰塚等何方江被成御座候茂慥ニ不相知、義久公御譜中穆佐へ有之筋相見得候由ニ而、御記録方より内々札方被申渡置候故成行即及披露、奉行川上大

六・添役東郷次太夫被差遣、拾二三日滞在ニ而篤与見分之上段々委敷被相糺、高岡郷士那答院七左衛門与申者時年八拾四歳ニ而、承傳候事有之由ニ而其場江被召呼候処、宝永二三年比ニ候半、拾五六歳罷成時分、親那答院勘解由左衛門存命ニ而召列、悟性寺江先祖墓参杯仕候節、此邊者 殿様御墓有之候場所ニ而大切成所之故、龜末徘徊等仕間敷旨、呉々咄聞せ置候旨直ニ為申出由、然者七左衛門事者、寛文十年 御石塔礎ニ為立居年より式拾貳年目元禄四未年之生ニ相當候間、親勘解由左衛門年輩者、專伊集院宮内・住持傳悦・野村半五左衛門杯同時之者ニ無疑候得者、若年より墓参等仕候節共、現在 御石塔之立居候場所等能々見覺罷在、右様咄聞せ置為申ニ相違有御坐間敷、左候得者、出雲殿御取拳無之年より、右之七左衛門拾五六罷成宝永二三年迄三拾六七年之間ニ、右之 御石塔轉ひ埋れ見失ひ候筋ニ相見得、又元禄録七戌年之生ニ相當候高岡花見村徳田門名頭九左衛門茂八拾壹歳ニ而、若年之比悟性寺江出家之供ニ而差越、笋掻攝候節、住僧藝傳和尚より、藥師堂之邊者 殿様御石塔有之由候間、猥ニ踏入

間鋪と幾度茂被申聞せ候与之趣茂為申出由、旁右通近郷之人迄承傳居候 御石塔ニ候得者、所中之古老ハ勿論、就中住僧者其御墓之為在跡共者代々承傳候半、左候得共、其比ハ 御石塔轉ひ失せ、御蓋石者此度被為出候直其邊之土中ニ埋れ居、 義天二字ある御石者存之外猶隔候所江同斷轉ひ埋居候而、其節為存知人無之、住僧或ハ近郷等之右躰古老共只申傳計ニ而、右大蹺之内外ニ何之誌銘茂無之、然共元禄十五二月、御記録奉行市来源右衛門廻勤之節書出候悟性寺由緒書等ニ茂、天正五年日州再安堵之節、 義久公より古例之通 久豊公御菩提所ニ被召成、本領被召附置候処、毀破勘落之砌、惣而為被召上由書記、勿論 大檀那前三州太守 義天存忠大禅伯と書、十文字御紋迄彫刻為仕餘程古躰之御位牌茂安置、且 貫明様御譜中并寛文十年願書ニ茂相見得、其上古老共右通申傳茂有之、旁以悟性寺内ニ 御石塔為有之事ハ無別条、且掘出候遺骨茂何角念入、常人之塚とハ不相見得、餘程疑敷方ニ為被相考由候得共、残碑断碕片言隻字茂其節不被見出ニ付難被得究、雖然右之形行無據候得者龜抹ニ者難被成置、段々

御手厚御改葬ニ而如本ニ被納置、其趣を石碑ニ被建置、以詔<sup>テ</sup>觀者<sup>ニ</sup>而使<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>以考<sup>レ</sup>焉<sup>ト</sup>と被刻置、別段訖与御位牌茂被召立、勿論住持申出之通楠木之本直茂不被仰付、彼是尚疑茂被残置候場所<sup>ニ</sup>付、六ヶ年以前天保七申十二月、寺社方御内用掛勤之方より極内分私式迄預尋問趣有之、浅陋之管見誠以乍恐世間拾集候物ニ而其涯勿卒別冊之通考綴遣置、其後心掛罷在ニ、追々考付候事共漫ニ書加置申候、然処此節相良氏御内用ニ而被差越、八拾日計滞留ニ而、段々精蜜ニ被為札盡、是迄百七拾年計被及沈没候 御石塔之蓋石并羌<sup>カ</sup>天と被讀付候輪石迄現ニ被為堀出候由承之、多年骨折為相勤人ニ者御座候得共、誠ニ一世之勲功此上者有御坐間敷、至私式欣躍之至、是社落合勘解由主人義祐を為諫時分、陸奥守久豊之法名義天二字ある石塔を古来嶋津領内之證據ニ為申立事、貫明様御譜中ニ被載置と申茂、右御石塔之事ニ可有御坐、又寛文十年、悟性寺傳悦より于今 義天様御石塔壹斤御坐候耳と御寺之由緒ニ申出、地頭伊集院宮内継書ニ茂無別儀与為申出茂、又野村半五左衛門より近々 御墓參と為申渡茂、皆右 御石塔

之事ニ可有御座、何共結構之御事、是迄段々御不幸ニ而、明暦元年、筑後殿より寺社由緒被相札候而、證文等被為渡候砌ニ者、現在被為立候 御石塔之由来共鑑司共申出洩候欵、證文等不被渡置、其後寛文六年よりハ寺社方被召建、奉行卷人之分別ニ而大抵之事迄ハ被致差引、且前々より修理被仰付来候寺社家ニ而茂、可成被及御省略略向ニ被仰渡置、専右躰御吟味之折柄、同十年、住持傳悦より右通 御石塔御坐候耳を由緒ニシテ願出候得共、左様成證文無之<sup>レ</sup>迎不及御札ニ茂、直様御取拳無之、夫より宝永二三年迄三拾六七年之間ニ、岸岡ニ而茂相崩候欵、拜掃等不行屆時節哉有之、御石塔轉ひ埋れ候得共、御取拳茂無之ニ付、堀出方之頓着仕者茂無之、終ニ見失ひ、只其御墓之為在跡計ハ此邊と住持共代々申傳來、宝永後七拾一年目計安永三年、前文之成行ニ而御骨被為出候得共、其上ニ 御石塔者無御坐、地盤石計ニ而被為納候甕之内外二年号月日・法号等之誌銘茂無之、 義天様御靈骨と難被考究成行之碑文を以、觀者ニ為告知相考可申向之旨趣被刻置、是迄者段々御不幸耳ニ御座候処、此度相良氏右次第御

蓋石井 弔天二字ある御石塔現在被為堀出候ニ付而者、即是碑文ニ茂被載置候殘断礪片言隻字と申事ニ相當、此上之明證者有御坐間敷、畢竟安永三年ニ者、右鉢之片言隻字塚之廻リニ不被見出之故計ニ御札究難被成向ニ承及、夫茂其時者御尤ニ御座候得共、右通現ニ御石塔被為堀出候上、安永之御札迄者 貫明様御譜中被載置候通、現在 御石塔髓ニ相立居候事を寛文十年頃迄能存知居為申者共之内、悟性寺傳悦・地頭伊集院宮内・郷土野村半五左衛門坏、同時代之高岡郷土祁答院勘解由左衛門与申者、寶永二三年之頃迄者存命ニ而罷在、其子祁答院七左衛門十五六歳罷成時分召列、墓參等仕候節、此邊者 殿様御墓為有之所ニ而大切成場所ニ候間、龜末ニ致徘徊間敷旨具々為申聞事共、右之七左衛門安永三年迄者八拾四歳ニ而存命仕、髓ニ承覺罷在、右被堀出候場所江罷出、此邊と直ニ為申出由、誠一往者 殿様迄茂每度御墓參為被遊 御石塔之事ニ候間、近郷迄茂老年之者共ハ承覺罷在候儀、左茂可有之事ニ而、住持者猶以代々申繼置、前文通藝傳代ニ茂高岡花見村之九左衛門、若年之比筭共搔候時分、藥師堂

之邊 殿様御石塔有之由候間、猥ニ不踏入様幾度茂為被申聞事、八拾一歳ニ而承覺為申出由、旁以住持者髓ニ申傳來候筋ニ相見得候へ共、畢竟前文通寛文十年以來寺社方御取奉無之故、夫形頓着仕者無御座、大概七八拾年之間ハ空敷打過候半、然処楠木申請人有之時ニ差掛り、住持茂立會、此楠之本直於有之者、義天様御石塔為有之所と申傳候場所へ必可相障礙為申募茂、實以無據事ニ可有御座、然処差付其所より 御靈骨被為出、殊更常人之葬具と相替、旁念入候御取仕立之由承傳居候処、此度直ニ其近邊より猶亦 御石塔之蓋石被為堀出、且 弔天二字ある輪石迄茂些隔候所江相轉ひ埋れ居候を被為堀出、右之蓋石を被為重候得者餘程恰好宜敷、石性茂同様ニ見得候由承及、此上猶又安永三年、 御骨之上ニ而堀出候地盤石迄茂被為堀出、三重共ニ被為組立候ハ、恰好旁之釣合如何可有御座哉、恰好等古鉢ニ於致相應者、頓与無疑茂 御石塔ニ而、且其為在場所迄茂弥右之 御骨之上ニ的中可仕、左候得者、直ニ是昔年 寛陽院様御墓參為被遊 御石塔之故物ニ而、住持傳悦・藝傳、地頭伊集院宮内、郷土野

村半五左衛門、高岡之祁答院勘解由左衛門杯、折節前  
 文通為申上、御墓所茂、皆此場所之、御石塔ニ相當可  
 申、但其證據之僅ニ連續可仕語脉者、右様安永之住持  
 承傳居候而、楠之本直於有之者、御石塔為在跡江必相  
 障与申募候趣、并勘解由左衛門より、此邊者、殿様御  
 墓為在所と咄聞せ置候趣を、其子七左衛門能承覺罷在、  
 為申出兩人之說者、乍口碑茂決而慥成事ニ可有御坐、  
 夫故天正四年御譜中ニ落合勘解由申置趣、又寛文十年  
 住持等申出置趣ニ茂逐一符合仕居候所ニ而、最早何茂  
 疑無之様御座候、此上猶又右様地盤石迄茂被組立、混  
 与恰好仕候、旁以久振古來之通、御靈骨之上ニ御復座  
 被遊筋ニ可有御座（候力）、御逝去以後當年迄四百拾七年  
 坎罷成、誠ニ久遠之事ニ者御坐候得共、右之御譜外以前  
 此、御石塔之事共相見得候舊記述者一切無御座由、左  
 候而、每物無實之事ハ自然与消行習ニ御座候得共、此  
 御石塔計ハ、前件御譜以來連々事証慥成向之古書等、  
 年經候程却而顯然仕、御國中一統之人氣茂増日傾慕仕  
 ニ付而者、安永之住持并七左衛門杯承覺候趣、弥無紛  
 筋ニ此節ハ御吟味茂被為在等と竊ニ奉恐悅罷在候、是

迄御不幸耳ニ而、存外久々被為潛居候儀、畢竟明曆・  
 寛文・安永之三度ニ一度茂此節相良氏程不被為届故ニ  
 可有御坐、殊ニ寛文以前者現在、御石塔立居候時分ニ  
 而申迄茂無御座、剩其頃ハ御規模被為究砌ニ而、無據  
 申出候ハ、此取拳茂可有之向、前文ニ茂相見得候通御  
 座候処、夫限住持茂不願出、又安永之度迎茂乍恐今少  
 シ被為盡御吟味御札候ハ、此節被為出候、御石塔其  
 節可被為掘出、於其儀者疾ニ被為究、一入、御崇敬茂  
 可被為在、殊ニ右之、御石塔者古來他邦より、御旧領  
 之證據ニ迄引上為申、御威光茂被為殘置、且御存生  
 内より山東江者被成御座度、思召茂被為在候事共、山  
 田聖榮茂被書置、旁以、御尊靈茂可被為安御寺ニ而、  
 今更疑者茂有御坐間敷之處、幾度茂被為打過、四百餘  
 年之只今ニ至候而者、乍恐御吟味茂不容易、又此節迎  
 茂不被為決候ハ、後年何之世ニ被為知候期可有御坐  
 哉、奉絶言語罷在候、又寛保二戌十二月、左衛門殿よ  
 り、誓詞等之事ニ付、御代々様御忌日御寺等被仰渡  
 候時分迄者、義天様御廟所不相知と有之、其後拾七  
 八年目宝曆九年、福昌寺恵燈院江被為札候節、恕翁

様御相願ニ茂 義天二字被為彫刻候 御石塔被成御座  
候事為相知由、然共 御靈骨又ハ御遺髮等被納置候訳  
相知不申由、是亦安永之御吟味、御記録方より者 御  
正統様ニ者御不相應之 御石塔と為被申上由、又寺社  
方より者 御正統様御相殿ニ被成御座茂無心元与為被  
申出由、左様成故ニ茂御座候哉、是迄惠燈院住持共代  
々申繼茂不仕、當住持共者此春迄不存位之由、如何様  
古來悟性寺江前文通之説申傳有之、福昌寺之 御石塔  
本式御取持不被為在、右次第ニ茂御座候哉、近頃拜詣  
奉窺候處、僅七八帖敷之 御靈屋内、中央ニ 恕翁様  
左右合而式拾四基計之 御石塔御并立被成御座、 恕  
翁様者格別ニ而 御石棺茂可被為在哉、其餘之御方様  
御銘々如何可被為在哉、天正以後之近例ニ而、其以前  
ニハ難引御座候得共、鹿籠長善寺江領主塔廟四數二間  
位茂可有之内ニ、石塔式拾餘基并立、皆共葬式相濟候  
跡之灰を、翌日住持役人合袂ニ而小壺ニ入納、埋メ候  
上ニ代々石塔相立、遺骸者皆別場所江葬埋仕來候由、  
若哉此向之 御石塔ニ候ハ、 御銘々様御遺骸被為  
納候程者無覺束、然共此度 御石塔兩所ニ被為出候ニ

付而者、何れ一方ハ 御逆修欵、御分骨欵、又者御遺  
髮等被為納候 御招魂墓ニ茂可有御坐、然者此御疑茂  
不被為晴候而者、乍恐何れニ茂難被為決候半、又安永  
之御糺ニ、所郷士小田四郎右衛門与申者六拾四才ニ而、  
拾壹式之比梅橋筑兵衛与申五拾計之者より承候迎、伊  
東領相成居候節潜ニ忍を遣、 御石塔取除、其下江頭  
石を埋、跡不知様為取計趣為申出由、右年輩ニ而相考  
候得者、筑兵衛ハ寛文九酉年頃、四郎右衛門ハ宝永四  
亥年ニ生候筋ニ而、其拾壹式者享保二三年ニ相當、前  
件祁答院父子よりハ格別皆年少之者共ニ御座候得者、  
決而傳誤茂可有御坐、右申通伊東領之節ニ候ハ、何  
ぞ潜ニ忍を遣候ニ者不及筈、其上 御石塔ハ寛文十年  
迄相立居候得者、伊東領之時取除与申茂偽説差知申候、  
乍然寛文十年より宝永二三年迄三拾六七年之間ニ、忍  
を遣取除と申事之誤ニ茂御座候ハ、聞得候様有之、於  
其儀ハ、此節被堀出候所迄彼方之者共潜ニ持行為埋置  
筋ニ茂可有之欵、左候得者、頭石を埋と申傳候ハ、此  
節被堀出候御蓋石カサニも可有御坐、弥其通候ハ、今少  
シ其為在下茂被為堀度所之様有之、然共安永并此度茂、

古墓石者外ニ段々埋居候を為被掘出由候へ者、旁小田  
か説ハ信用難仕御坐候、扱此段々之愚按、誠ニ不容易  
機蜜之御事、私式極々乍恐、六年以前極内分御内用方  
之人より預尋、為申上置愚考茂御座候得者、只竊ニ奉  
想像考付候成、兼而御心安任被仰下、此中御内話之事  
迄相混、極御内分先比奉備 高覽候帳末ニ綴(添カ)、又拜  
呈仕候、御一覽被為濟候ハ、御返被(下カ)□候、他見偏ニ御  
勘弁奉頼上候、以上、

(天保十二年)  
丑八月

伊地知季安拜

新納久仰賢君  
御近侍衆



文  
書  
目  
録

## 例言

- 一 本巻に収めた「伊地知季安伝」「伊地知季安日記秘要」「季安撰考記」「旧記題苑（東京大学史料編纂所）」「旧記題苑（大阪大学附属図書館）」「国分正興寺仁王齡岳様御真影一件愚考」「五指量愛染明王由来記」「西藩田租考」「先年差出置候著述物就御手許御用又被下ヶ置候一件書留」「忠久公丹後局鎌倉御宅迹址抄」「花尾祭神輯考」「花尾社伝記」「藤原姓伊東氏系図」「穆佐悟性寺御石塔一件私考」「穆佐悟性寺義天様御石塔一件愚按追考」「穆佐悟性寺義天様御石塔一件勘考書上下」「穆佐悟性寺義天様御石塔一件考書卷下」を、それぞれ掲載順に通し番号を付して収録した。
- 一 文書は、番号のほか、年月日、文書名を記載した。
- 一 文書の年月日については、原文記載の年紀はそのままとし、補筆の年紀は「」で囲んだ。また、疑義の示されているものは「」で囲んで区別した。
- 一 年紀を欠くものうち、推定しうるものは（）で示した。
- 一 月の異称は数字に改めたが、正月、朔日、晦日などはそのまま残した。
- 一 原則として『鹿児島県史料 旧記雑録』及び『同 旧記雑録拾遺』にならい文書名を付した。
- 一 重複等により省略した文書には※を付し収録した。



三七				小番・新番書上	五六	(安政 四年)	九月十一日	伊地知季安書付
三八	(嘉永 元年)	四月廿四日	堅山利武達書	五七	1 (安政 四年)	九月十八日	目付連署達書	
三九	(嘉永 元年)	四月	調所広郷申渡書		2 (安政 四年)	九月十八日	伊地知季安請書	
四〇	(嘉永 元年)	四月廿五日	伊地知季安覚書	五八	(安政 四年)	九月十九日	伊地知季安書付	
四一	(嘉永 元年)	四月廿五日	伊地知季安口上覚	五九	1 [安政 四年]	十月廿七日	小納戸達書	
四二	1 (嘉永 五年)	八月十八日	伊木常誠達書		2 (安政 四年)	十月廿七日	伊地知季安請書	
	2 (嘉永 五年)	八月十八日	伊地知季安請書	六〇	(安政 四年)	十二月 廿日	小納戸達書	
四三	(嘉永 五年)	八月(十九日)	島津久宝達書					
四四	1 (嘉永 五年)	八月十九日	伊地知季安覚書					
	2 (嘉永 五年)	八月十九日	伊地知季安口上覚					
	3 (嘉永 五年)	八月十九日	伊地知季安書付					
	4 (嘉永 五年)	八月十九日	伊地知季安書付					
四五	(嘉永 五年)	八月十九日	山口利紀達書	六四	(安政 六年)	七月 三日	伊地知季安覚書	
四六	(安政 二年)	六月 朔日	山田為正書狀	六五	1 (安政 六年)	八月(九日)	新納久仰申渡書	
四七	(安政 二年)	六月 晦日	小納戸達書		2 (安政 六年)	九月	伊地知季安外二名連署願書	
四八	(安政 二年)	七月 朔日	伊地知季安口上書	六六	1 (文久 元年)	二月	新納久仰申渡書	
	1 (安政 四年)	九月 七日	島津久籐達書		2 (文久 元年)	十一月	喜入久高申渡書	
四九	2 (安政 四年)	九月 七日	伊地知季安請書	六七	1 (安政 六年)	十二月廿二日	伊地知季安請書	
	(安政 四年)	九月(八日)	島津久包達書		2 (安政 六年)	十二月廿二日	小納戸達書	
五〇	(安政 四年)	九月 八日	伊地知季安書付	六八	(安政 六年)	十二月廿三日	伊地知季安書付	
五一	(安政 四年)	九月 八日	伊地知季安書付	六九	(安政 六年)	十二月廿一日	小納戸達書	
五二	(安政 四年)	五月(九) 八日	山田為正書狀	七〇	(安政 六年)	十二月廿一日	年頭供廻之事	
五三	1 (安政 四年)	九月 八日	伊地知季安覚書	七一	(万延 元年)	三月 三日	伊集院中二達書	
五四	(安政 四年)	九月 八日	伊地知季安口上覚	七二	(万延 元年)	四月	伊地知季安差出	
五五	(安政 四年)	九月 十日	大番頭座達書	七三	(万延 元年)	九月十四日	伊地知季安覚書	
		九月(十一日)	大番頭達書					

〔伊地知季安日記秘要 一二〕

七四	(万延 元年)	十月廿九日	勘定所達書	1	(文久 二年)	伊地知季安書付
七五	(万延 元年)	十一月 朔日	勘定所引付	1	(文久 三年)	伊地知季安届書
七六	1 (万延 二年)	正月十二日	小納戸達書	1	(文久 三年)	伊地知季安書付
	2 (万延 二年)	正月十二日	伊地知季安請書	1	(文久 三年)	伊地知季安書付
七七	(文久 二年)	十月 二日	山口利紀達書	1	(文久 三年)	伊地知季安書付
	諸郷神社為見分廻勤ニ付札方ケ條書					
七八	1 (文久 二年)	十一月	伊地知季安達書	1	(文久 三年)	伊地知季安書付
	2 (文久 二年)	十一月	伊地知季安廻状	1	(文久 三年)	伊地知季安書付
	御内用ニ付御領国中寺社見分廻勤日記					
七九	1 (文久 二年)	十一月十三日	高津内藏達書	1	(元治 二年)	小森新藏達書
	2 (文久 二年)	十一月十三日	伊地知季安請書	2	(元治 二年)	伊地知季安請書
八〇	(文久 二年)	十一月(十四日)	川上久美申渡書	1	(元治 二年)	正月(十一日)桂久武達書
八一	1 (文久 二年)	十一月十八日	伊地知季安願書	1	(元治 二年)	伊地知季安口上覚
	2 (文久 二年)	十一月	川上久美申渡書	1	(元治 二年)	伊地知季安書付
	3 (文久 二年)	十一月廿一日	北郷久将達書	1	(元治 二年)	伊地知季安口上覚
八二	(文久 二年)	十一月十八日	伊地知季安願書	1	(元治 二年)	伊地知季安書付
	1 (文久 二年)	十一月十八日	伊地知季安書付	1	(元治 二年)	伊地知季安口上覚
八三	(文久 二年)	十一月十八日	伊地知季安願書	1	(元治 二年)	伊地知季安書付
	2 (文久 二年)	十一月十九日	春屋役達書	1	(元治 二年)	伊地知季安書付
八四	(文久 二年)	十一月十八日	伊地知季安口上覚	1	(元治 二年)	伊地知季安口上覚
	1 (文久 二年)	十一月廿一日	伊地知季安書付	1	(元治 二年)	堀切善藏書状
八五	(文久 二年)	十一月廿一日	伊地知季安届書	1	(元治 二年)	帖佐与方藏役人外代官 二名連署手形
八六	(文久 二年)	十二月 二日	伊地知季安届書	1	(元治 二年)	伊地知季安役人種子油 申請書

一〇二	(元治 二年)	三月廿二日	蓑田長胤達書	一三三			山田為正書狀抄
一〇三			豎山利武書取書物書上	一三四	(慶応 元年)	十二月	川上正十郎書狀
一〇四	(慶応 元年)	四月十七日	帖佐与方出物藏役人外代官二名連署手形	一三五	(慶応 元年)	十二月廿三日	奏者番連署達書
一〇五	(慶応 元年)	五月廿九日	柳正之丞達書	一三六	(慶応 元年)	十二月廿三日	伊地知季安書付
一〇六	(慶応 元年)	五月廿九日	伊地知季安請書	一三七	(慶応 元年)	十二月廿五日	伊地知季安口上覚
		閏五月 朔日	桂久武申渡書	一三二	(慶応 元年)	十二月廿五日	伊地知季安書付
			伊地知季安拜領豎目録	一三一	(慶応 元年)	十二月廿五日	川上正十郎・二階堂行經連署達書
一〇七	(慶応 元年)	閏五月	伊地知季安口上書	一三〇	(慶応 元年)	十二月廿六日	伊地知季安書請書
一〇八	(慶応 元年)	閏五月十三日	山之内作次郎達書	一二九	(慶応 元年)	十二月廿六日	納戸藏役人預狀
一〇九	(慶応 元年)	閏五月十八日	帖佐与方藏役人外代官二名連署手形	一二八	(慶応 元年)	十二月廿六日	二之丸納戸藏役人預狀
一一〇	(慶応 元年)	六月廿一日	帖佐与方藏役人外代官二名連署手形	一二七	(慶応 元年)	十二月廿六日	先進繡像玉石雜誌書抜年頭太刀進上人教書上
一一一	(慶応 元年)	九月 十日	勘定所達書	一二六	(慶応 元年)	十二月廿六日	記録奉行役付太刀進上者名書上
一一二			町奉行格御役料高書上	一二五	(慶応 元年)	十二月廿九日	伊地知季安等口上覚
一一三	(慶応 元年)	十一月十七日	奏者方達書	一二四	(慶応 元年)	十二月廿九日	記録奉行達書
一一四	(慶応 元年)	十一月廿八日	伊地知季安差出	一二三	(慶応 二年)	十二月廿七日	伊地知季安口上覚
一一五	(慶応 元年)	十一月廿八日	二之丸納戸藏役人預狀	一二二	(慶応 二年)	十二月	出雲答書
一一六	(慶応 元年)	十一月廿九日	伊地知季安差出	一二一	(慶応 二年)	十二月	伊集院十右衛門・川上正十郎連署書付
一一七	(慶応 元年)	十一月廿九日	納戸藏役人預狀	一二〇	(慶応 二年)	十二月	伊集院十右衛門・川上正十郎連署書付
一一八	(慶応 元年)	十一月廿九日	奏者番連署達書	一一九	(慶応 二年)	十二月廿八日	二之丸納戸藏役人預狀
一一九	(慶応 元年)	十一月廿九日	伊地知季安進上目録	一一八	(慶応 二年)	十二月廿九日	納戸藏役人預狀
一二〇	(慶応 元年)	十一月廿九日	伊木常誠書狀	一一七	(慶応 三年)	正月 朔日	伊集院十右衛門・川上正十郎連署達書
一二一	(慶応 元年)	十月廿五日	山田玄斉為正書狀	一一六	(慶応 三年)	正月 十日	入来院公寛達書
一二二			玉海	一一五	(慶応 三年)	正月 十日	伊地知季安請書

季安撰考記

7	6	5	4	3	2	1	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8
二月廿四日	九月八日	八月四日	六月廿七日	四月廿七日	四月廿七日	四月廿七日	元弘三年	文保三年	文治四年	(元徳)元年	十月五日	十月	十月	四月廿九日	七月	十月十三日	十月	六月	六月	十月	十月	四月廿四日	四月廿九日	四月廿九日	四月廿九日	四月廿四日
伊地知季安考証並書狀	近衛植家手跡色紙形	近衛家久書狀	近衛植家書狀	近衛植家書狀	近衛植家書狀	近衛植家書狀	伊地知季安考証並書狀	近衛植家手跡考	近衛尚通書狀	進藤長美書狀	近衛植家書狀	近衛植家書狀	近衛植家書狀	近衛植家書狀	近衛植家書狀	近衛植家書狀	近衛植家書狀	近衛植家書狀	近衛植家書狀	近衛植家書狀	近衛植家書狀	伊地知季安書狀	伊地知季安書狀	伊地知季安書狀	伊地知季安書狀	伊地知季安書狀
※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※
五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	四	三	二	二	二	
伊地知季安和歌並漢詩	伊集院兼誼書狀	市來政寬書狀	某書狀	伊地知季安書狀	國分正興寺仁王考齡岳 様御真影一件	鹿兒島、伊敷、四郎ヶ 坂等之說	島津莊之拔書	肝屬氏系譜拔書写	島津家由来	古史徵	島津莊莊官等申狀	鹿屋忠兼覚書	鹿屋忠兼覚書	神柱大明神縁起	南山巡狩録拔書	都城名勝志差出	伊地知季安考	鎮西下知狀	薩摩国因田帳抄	薩摩国伊作莊立券狀	伊作莊雜掌並下司申狀	薩摩国伊作莊立券狀抄	等	島津貞久施行狀	穆佐悟性寺古塔考	

旧記題苑 (東京大学史料編纂所)

- 一 伊地知季安序文
- 二 旧記題苑

旧記題苑 (大阪大学附属図書館)

- 一 伊地知季安序文
- 二 旧記題苑
- 三 新納家書目

国分正興寺仁王齡岳様御真影一件愚考

国分正興寺仁王齡岳様御真影一件愚考

貞治 五年 十一月 島津氏久願文

国分正興寺仁王之儀齡岳様御真影并本田親治真像ニ可有之与之愚按追考

二 本田親治譜

三 島陰雜著歎末文

※ 貞治 五年 十一月 島津氏久願文

四 正平十三年 十一月 九日 島津氏久書下

五 (永和 三年) 十二月 十一日 島津氏久書狀

六 瀬戸口秀安自記

七 長祿 二年 正月 四日 本田国親書狀

八 正興寺二天齡岳様御真影御回祿一件私考

九 伊地知季安覚

一〇 樺山玄佐自記抄

一一 貴久公記抄

一二

五指量愛染明王由来記

一三 大永 七年 十二月 二日 新納忠勝願文抄

一四 天文十一年 十二月 十五日 新納安千代丸忠願文

一五 本田家檢断注文抄

一六 南浦文集

一七 [永和 元年] 八月廿七日 島津道貞師書狀

一 享祿 四年 二月十九日 島津勝久書下

二 享祿 四年 三月 八日 島津勝久書下

三 享祿 四年 三月 八日 島津勝久書下

四 八木正信覚

五 (永祿 五年) 十月十六日 一乘院頼忠書狀

六 永祿 十年 十月 十日(書) 島津義久書下

七 [天正 九年](五) 三月十九日 島津忠平義書狀

八 [天正 十年](五) 正月 八日 島津忠平義書狀

九 [天正 十年](五) 五月 十日 島津忠平義書狀

一〇 [天正 十年] 九月 六日 島津忠平義書狀

一一 五指量愛染明王由来

一二 天正十三年 四月 吉日 光明真言法卷數

一三 六月十三日 一条院快忠書狀

一四 [寛永十四年] 二月廿九日 島津光久書狀

一五 元祿十五年 四月十四日 大乘院覚雲覚書



西藩田租考

〔西藩田租考 上〕

一六	宝永 三年	三月廿二日	大乘院騰雲書付
一七	宝永 七年	閏八月 五日	伊集院忠覚・川上久東 連署証状
一八	正徳 二年	九月十八日	島津久当外三名連署達 書
一九			五指量愛染明王像事証
二〇			新板大日本史
二一	安政 三年	十一月 穀旦	伊地知季安跋書
二	元禄十一年	十月 九日	島津久年覚書抄
三			井田第一
四			授田第二
五			班田第三
六			租税第四
七			蚕織第五
八			調庸第六
九			丁役第七
一〇			馬牧第八
一一			国郡第九
一二			官員第十
一三			正公第十一
一四			僧尼第十二
一五			倉廩第十三
			覇制第十四

〔西藩田租考 下〕

一六	貫高第十五
一七	永高第十六
一八	京制第十七
一九	村高第十八
二〇	今制第十九
二一	三役第二十
二二	度考第二十一
二三	斛高第二十二
二四	代官第二十三
二五	復封第二十四
二六	琉租第二十五
二七	慶檢第二十六
二八	寛檢第二十七
二九	万檢第二十八
三〇	役米第二十九
三一	代米第三十
三二	賦米第三十一
三三	口米第三十二
三四	常租第三十三
三五	出物第三十四
三六	檢損第三十五
三七	食法第三十六
三八	京判第三十七
三九	起先第三十八
四〇	享檢第三十九

先年差出置候著述物就御手許御用又被下ヶ置候一件書留

四一	兵備第四十	一	(天保十四年)	十月	伊地知季安書置
四二	等級第四十一	二	(天保十四年)	六月十一日	伊地知季安覺書
四三	義倉第四十二	三	(天保十四年)	六月廿七日	伊地知季安覺書
四四	制用第四十三	四	(天保十四年)	九月廿九日	伊地知季安覺書
四五	伊地知季安奧書	五	(天保十四年)	九月廿九日	伊地知季安覺書
		六	(天保十四年)	九月十五日	伊地知季安覺書
		七	(天保十四年)	十月三日	伊地知季安覺書
		八	(安政七年)	正月	伊地知季安何書
		九	(安政六年)	正月廿一日	伊地知季安書付
		一〇	(慶応三年)	二月廿九日	伊地知季安覺書
		一一			花尾祭神輯考
		一二	(慶応二年)	十月廿七日	伊地知季安書付

忠久公丹後局鎌倉御宅迹址抄

一	大日本史	比企能員伝
二	東鑑	
三	東鑑	
四	東鑑	

五	鎌倉志	一〇	宝永六年	二月二日	鎌倉志
六	鎌倉志	一一			田中国明・肥後盛雄連署書状
七	東鑑	一二			大伴左衛門家藏日記
八	鎌倉志	一三			大伴左衛門家藏覚
九	鎌倉志	一四			大日本史

花尾祭神輯考

〔花尾祭神輯考〕

一	鎌倉靈場順拝行程図	一五	源三位頼政卿集
二	妙本寺絵図	一六	東鑑
三	源氏系図	一七	鎌倉靈場順拝行程図
四	比企氏系図	一八	源氏系図

花尾社伝記

〔花尾社伝記 上〕

一	伊地知季安序文	元治元年	十一月
二	秩父郡司解	天曆三年	二月
三	北条時政書状	(元久二年)	正月十四日
四	酒匂貞阿資文書目錄書		

五	(文曆 二年)	閏六月廿九日	北条泰時書狀抄
六	承久 三年	十一月十六日	厚智山住僧等所当料田日記
七	仁治 三年	十月十四日	薩摩國滿家院厚智山四至境定書
八	文永 四年	十二月 三日	島津道弘時讓狀抄
九	(弘安 三年)	七月廿一日	島津久經書狀
一〇	元亨 四年	三月十三日	島津久長相伝文書目録書上

〔花尾社伝記 中〕

一一	正平 五年	九月廿八日	伊集院道忍 <small>忠</small> 園書下
一二	延徳 三年	三月廿七日	一宮大明神縁起
一三	享祿 四年	二月十九日	島津勝久書下
一四	享祿 四年	三月 八日	島津勝久書下
一五	享祿 四年	三月 八日	島津勝久書下
一六	〔天文 五年〕	七月廿五日	島津勝久書狀
一七	(永祿 五年)		稻荷大明神印言写
	1 元祿 九年	二月	一乘院賞秀書
一八		十月十六日	一乘院頼忠書狀
一九	永祿 十年	十月 十日	島津義久書下
二〇	〔天正 四年〕	十二月十九日	島津忠平 <small>義</small> 弘書狀
二一	〔天正 五年〕	正月 八日	島津忠平 <small>義</small> 弘書狀
二二	〔天正 五年〕	三月十九日	島津忠平 <small>義</small> 弘書狀

〔花尾社伝記 下〕

二三	〔天正 五年〕	五月 十日	島津忠平 <small>義</small> 弘書狀
二四	〔天正 五年〕	九月 六日	島津忠平 <small>義</small> 弘書狀
二五			五指量愛染明王由来
二六	天正十三年	四月 吉日	光明真言法巻数
二七		六月 三日	島津義弘書狀
二八	(寛永十四年)	二月廿九日	島津光久書狀
二九	寛文 十年	四月	花尾神廟臨燈銘並序
三〇	元祿十五年	正月十二日	寺社奉行所達書
	1 元祿十五年	四月十四日	大乘院知事護國院書付
三一			清水盛富年中記
三二		三月廿二日	大乘院騰雲書付
三三	宝永 三年	二月 二日	新納久珍達書
三四		八月 穀日	花尾宮並平等王院持尊・五院再営来由記
三五	宝永 五年		伊集院忠覚・川上久東連署証狀
三六	宝永 七年	閏八月 五日	寺社奉行所申渡書
三七	正徳 元年	九月十五日	大乘院知事副狀
	1 (正徳 元年)	九月十八日	島津久当外三名連署達書
三八	正徳 二年	九月十八日	
三九	正徳 三年	二月十三日	比志島範房覚書
四〇	正徳 三年	四月 十日	鐘樓開眼供養寄進狀
四一	正徳 三年	四月 十日	花尾山鐘銘并叙

四二 嘉永 七年 五月 上瀬 島津久治石燈爐寄進狀

藤原姓伊東氏系圖

一 藤原姓伊東氏系圖  
高麗入日記抜書

二 「慶長<sup>三</sup>二年」三月 七日 新納為舟<sup>忠</sup>書狀

三 「寬永十年」十月廿四日 伊勢貞昌書狀

四 「寬永十年」五月廿二日 伊東新右衛門願書

五 「寬文四年」五月廿二日 大山綱通書狀

六 「寬文十一年」二月十二日 伊東新右衛門願書

七 生駒少左衛門外三名連 署口上書

穆佐悟性寺御石塔一件私考

一 寬文十年 四月 五日 悟性寺差出

2 1 (寬文十年) 四月十二日 穆佐嘯・横目連署副書

2 (寬文十年) 四月十三日 伊集院忠鎮願書

三 寬文十年 四月十九日 寺社奉行所申渡書

四 安永六年 十一月廿一日 穆佐郷古塚記

五 「天保八年」二月 伊地知季安識語

菱刈隆觀申渡書

穆佐悟性寺義天様御石塔一件愚按追考

一 軍記

二 地頭系圖

三 山田聖栄自記

四 山田聖栄自記  
山田聖栄自記  
古今載

五 山田聖栄自記

六 山田聖栄自記

七 山田聖栄自記

八 山田聖栄自記

九 山田聖栄自記

一〇 山田聖栄自記

一一 山田聖栄自記

一二 山田聖栄自記

一三 山田聖栄自記

一四 山田聖栄自記

一五 山田聖栄自記

一六 山田聖栄自記

一七 山田聖栄自記

一八 山田聖栄自記

一九 山田聖栄自記

穆佐悟性寺義天様御石塔一件勘考書上下

一 建久八年 六月 日向國因田帳抄

二 元弘三年 二月 三日 伊東氏系圖抜書

三 文和五年 二月 廿八日 後醍醐天皇繪旨

四 文和五年 二月 廿八日 島山直顯書下

五 正平十五年 五月 廿日 左衛門尉等連署奉書

六 正平十六年 二月 九日 下野守祐氏寄進狀

七 正平十五年 五月 廿日 藤原秀良寄進狀

八 正平十六年 二月 九日 藤原直綱寄進狀

九 建武元年 八月 廿五日 藤原直綱寄進狀

一〇 建武元年 三月 十二日 足利尊氏施行狀

一一 建武元年 四月 廿八日 後醍醐天皇繪旨

一二 明德二年 八月 七日 室町幕府御教書

一三 明德二年 九月 廿一日 明應書狀

一四 日向記

一五 伊東祐安伝

一六 山田聖栄自記

一七 山田聖栄自記

一八 山田聖栄自記

一九 山田聖栄自記

二〇	応永十一年	六月廿九日	足利義満御判御教書	四六			山田聖栄自記
二一	応永十六年	九月 十日	足利義持御判御教書				山田聖栄自記
二二	応永十九年	三月 廿日	島津久豊宛行状	四七	1	応永卅二年	八月廿八日 足利義持御判御教書
二三			伊東祐安伝	四八			伊東祐立伝
二四			日向記	四九			応永記
二五			山田聖栄自記	五〇			庄内平治記
二六	応永 廿年	四月廿九日	島津久豊安堵状	五一		元亨 五年	後正月廿二日 島津貞久国廻狩供人数 注文抄
二七	応永 廿年	九月廿五日	島津久豊宛行状	五二			鮫島古船齋賞書
二八			伊東祐安伝	五三			伊東祐立伝
二九			日向記				
三〇			山田聖栄自記	五四		永享 四年	五月十五日 島津貴久国起請文
三一			日向記	五五			伊東祐立伝
三二	応永廿四年	九月十二日	沙弥某奉書	五六			日向記
三三			日向記	五七			悟性寺一卷
三四	応永廿五年	正月十四日	伊東祐立契状	五八		永享 四年	七月十三日 樺山孝久書状
三五	応永廿五年	正月十四日	伊東祐立契状	五九		永享 四年	八月廿七日 島津好久用契状
三六			伊東祐安伝				島津好久用契状
三七			日向記	六〇		永享 四年	十月十一日 島津忠国宛行状
三八			応永記	六一		永享 五年	七月 八日 島津忠国宛行状
三九			山田聖栄自記	六二			伊東祐安伝
四〇			山田聖栄自記	六三			日向記
四一			山田聖栄自記	六四			日向記
四二			山田聖栄自記	六五		永享 七年	十月十四日 島津貴久国起請文
四三			山田聖栄自記	六六		永享 七年	十月十四日 本田重経等連署起請文
四四			山田聖栄自記				
四五			山田聖栄自記				

六七	永享 八年	五月 廿日	島津忠国宛行状	九一			山田聖栄自記
六八	永享 八年	八月 三日	島津忠国安堵状	九二			酒匂安国寺申状
六九	永享 八年	六月 廿四日	伊集院熙久契状	九三			紀定清証文
七〇			仲翁禪師内集	九四			島津忠国書状抄
七一	嘉吉 元年	九月 十二日	和田正存契状	九五		十二月十三日	島津忠国書状
七二			日向記	九六			島津立久覚
七三			伊東祐立伝	九七			三ヶ国物語
七四	文安 元年	十月 十四日	伊東祐堯契状	九八			穆佐地頭飯屋記録
七五			伊東祐堯契状	九九	貞享 三年	三月十七日	某覚書
七六		九月 廿一日	島津貴久 <small>忠</small> 書状	一〇〇		五月十二日	伊集院忠鎮覚書
七七	文安 元年	十月 十四日	野辺盛吉契状	一〇一	貞享 四年	三月十五日	穆佐悟性寺薰良願書
七八			日向記	一〇二	元禄 十年	閏二月十四日	穆佐天正寺・悟性寺由緒書出
七九			伊東祐堯伝		1 元禄 十年	閏二月十三日	穆佐天正寺・悟性寺由緒書留
八〇	文安 二年	四月 三日	伊東六郎四郎契状		2 (元禄 十年)	閏二月十四日	阿万十左衛門外二名連署副書
八一			日向記				穆佐下倉永村若宮八幡宮奉納劍函
八二			伊東祐堯伝	一〇三			伊東祐堯伝
八三			日向記	一〇四			日向記
八四	文安 三年	九月 十六日	新納忠治外二名連署契状	一〇五			新納家覚書
八五	文安 三年	九月 十七日	樺山孝久契状	一〇六	寛正 六年	二月廿九日	落合兼朝聞書
八六	文安 三年	九月 廿九日	島津忠国契状	一〇七			犬追物手組
八七			日向記	一〇八			島陰雜著上棟銘
八八			伊東祐堯伝	一〇九			伊東祐国妹伝
八九			日向記	一一〇			伊東義祐姉伝
九〇	〔文安 五年〕	九月 廿六日	伊東祐堯書状	一一一			



二三	〔明曆 二年〕	三月 八日	島津久通外四名連署廻狀	四四	〔元祿 十年〕	三月十八日	評定所廻狀
二四	明曆 二年	四月十八日	鎌田政昭置文	1	元祿十六年	十月廿二日	市來家年覺書
二五	〔享保十三年〕	十二月	某調書	2	〔元祿十六年〕		某覺書
二六	〔明曆 二年〕	閏四月 朔日	島津久通外四名連署廻狀	四五			
二七	〔明曆 二年〕	六月廿二日	鎌田政昭廻狀	1	元祿 四年	十二月 五日	穆佐菩提所洗心山悟性寺由緒書
二八	〔明曆 二年〕	七月 六日	伊集院久州・田代清堅連署書狀	2	〔元祿 四年〕	十二月 七日	悟性寺無外輿書
二九	〔明曆 三年〕	三月廿五日	伊集院久州・田代清堅連署書狀	3	元祿 十年	閏二月十四日	穆佐天正寺・悟性寺由緒書留
三〇	〔明曆 三年〕	四月 九日	伊集院久州・田代清堅連署書狀	4	〔元祿 十年〕	閏二月十四日	阿万十左衛門外二名連署副書
三一			鎌田藤馬家藏文書書上拔書	四六	〔寬文 六年〕	八月十九日	寺社方古日記
三二			鎌田藤馬家藏文書書上拔書	四七	〔寬文 六年〕	八月十九日	老中口達書之写
三三	万治 二年	二月 十日	喜入久守等連署廻狀	四八			某達書
三四	万治 二年	四月 十日	弘誓寺宗珉願書	四九	〔寬文 六年〕	九月 十日	入来院重頼書付
三五	万治 二年	八月 日	鎌田政直証狀	五〇			寺社方古日記
三六	〔万治 二年〕	九月 三日	某達書	五一			寺社方古日記
三七	〔万治 二年〕	九月 朔日	某書狀	五二			寺社方古日記
三八	〔万治 二年〕	十月 朔日	某口狀書	五三			寺社方古日記
三九	〔万治 二年〕	十月 二日	龜山久運請狀	五四	〔寬文 八年〕		寺社座書付
四〇	〔万治 二年〕	十月 七日	鎌田政直返答書	五五	〔寬文 八年〕		寺社座書付
四一	〔万治 二年〕	十二月 五日	某廻狀	五六	〔寬文 八年〕	十月十七日	島津久胤書狀
四二		十月 五日	某申渡書	五七			寺社方古日記
四三	〔元祿 七年〕	八月廿六日	田中国明・伊地知重英連署達書抄	五八			寺社方古日記
				五九			川上親敷・東郷実美届
				六〇	〔安永 三年〕	二月廿六日	書拔書



六一	[安永 三年 五月 八日]	川上親敷・東郷実美調書拔書	七六	三月	野村半五左衛門達書 參勤上下帳拔書
六二		島陰雜著	七七		
六三		島津年久歲祭文抄	七八		
六四		島津征久祭文抄	七九		
六五		吉田清純調書抄	八〇	[明曆 元年] 八月廿五日	鎌田政昭廻狀
六六	寛保 二年 十二月	島津久雨書付	八一	[明曆 元年] 八月 卅日	外城調難形
六七	永正 六年 八月 日	天祐宗津書狀抄	八二	[明曆 元年] 十二月十四日	評定所廻狀
六八	1 十一月廿九日	福昌寺副司書付	八三	明曆 元年 四月 十日	鎌田政昭証狀
	2 十一月 晦日	山嘜吉利次郎左衛門書付	八四	万治 二年 八月 日	弘誓寺宗珉願書
	3 十二月 朔日	皇德寺副司書付	八五	[元禄 八年] 二月十六日	記録所調書
六九		島津久豊廟所灰塚札一卷帳題名書上	八六	[元禄 八年] 三月 五日	寺社座達書
七〇	[安永 三年 五月 八日]	川上親敷・東郷実美調書拔書	八七	[元禄 八年] 三月 十二日	惠燈院石改差出
七一	[安永 三年 八月十一日]	寺社奉行調書拔書	八八	[元禄 八年] 四月十九日	福昌寺愚海口上書
七二	[安永 三年 五月 八日]	川上親敷・東郷実美調書拔書	八九	[元禄 九年] 十一月 五日	篠原喜右衛門覚書
七三	1 永禄十三年 八月十八日	伊東氏願書	九一	[天保十二年] 八月	伊地知季安書付
	2 [真享 四年] 十月 三日	寺社座書付			
	3 [真享 四年] 十月 七日	寺社座覚書			
	4 [真享 五年] 七月廿三日	法華嶽寺白岩屈書			
	5 (嘉永 六年) 十月 九日	伊地知季安追考			
七四	(天保十三年) 三月十五日	伊地知季安屈書			
七五	(天保十三年) 三月十五日	伊地知季安奧書			

鹿兒島県史料編さん関係者

史料編さん  
顧問  
東京大学  
史料編纂所所長  
横山 伊徳

国立歴史  
民俗博物館前館長  
宮地 正人

鹿兒島大学名誉教授  
五味 克夫

九州大学名誉教授  
安藤 保夫

委員  
原 口 泉  
晋 藤 哲 哉

三 木 靖  
日 隈 正 守

宮 下 満 郎  
塩 満 郁 夫

堂 満 幸 子  
夫

鹿兒島県歴史資料センター黎明館  
館 長 牛之濱 道 久

調査史料室  
長 徳 永 和 喜

学芸専門員  
栗 林 文 夫

資料調査  
高 原 千 鶴

編集員  
梶ヶ山 梨 沙  
黒 樺 山 美 和  
川 智 世

中野 尚 子

鹿 兒 島 県 史 料 旧記雑録拾遺伊地知季安著作史料集八

平成 21 年 2 月 21 日 発 行 非 売 品

編 集 鹿兒島県歴史資料センター黎明館  
発 行 鹿 兒 島 県

印刷所 株式会社 きょうせい